

国立国語研究所学術情報リポジトリ

岩手県田野畠村方言のアクセント調査報告： 北奥方言アクセント祖体系との関連で

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-01-15 キーワード (Ja): キーワード (En): Tanohata dialect, accent, archaic forms, proto-accent system of Northern Tohoku dialects, reconstruction 作成者: 上野, 善道, UWANO, Zendo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003096

岩手県田野畠村方言のアクセント調査報告 ——北奥方言アクセント祖体系との関連で——

上野善道

東京大学名誉教授／国立国語研究所 共同研究員

要旨

岩手県沿岸北部に位置する田野畠村方言について、体言および用言活用形を対象とした調査の報告を行なう。そこには3モーラ名詞の第6・7類や活用形のいくつかに北奥方言の中で最も古いと推定される特徴が見られ、それらが北奥アクセント祖体系の拙案とほぼ一致することを述べたあと、その資料に基づいて祖体系案の微修正をする*。

キーワード：岩手県田野畠村方言、アクセント、古形、北奥アクセント祖体系、再建

1. はじめに

本誌『国立国語研究所論集』を中心に数回に渡って掲載してきている北奥方言アクセント調査報告の一環として、今回は1地点だけではあるが、岩手県沿岸北部の（1）を取り上げる。2019年7月と12月、そして2020年1月のわずか3回の調査で体言の基本的な枠組みと用言活用形の概要を聞いた段階であり、その後に予定していた調査も新型コロナウイルスの関係でできない状態が続いているが、これまで私が調べた中で、拙論（2020b）に示した北奥方言アクセント祖体系案に最も近い方言であり、その微修正に役立つと判断したので、発表に踏み切ることにした。

(1) 調査地点と話者

岩手県下閉伊郡田野畠村 牧原 登 (ma[gi]hara no[bo]ru) 氏 1945 (昭和 20) 年生 元教員

牧原氏は、30年ほど前から宮古市にお住まいであるが、郷里の田野畠村浜岩泉の隣接集落（同一学区）で事実上同一方言の大芦（一般に「おおわし」とも）の長老夫妻ならびに故母堂などから聞き取った方言語彙を基にした牧原（2014）という私家版方言集を出しておられる。戦後すぐのお生まれながら、9人兄弟の末弟として、明治半ば生まれのご両親、大正から昭和前期生まれのご姉兄の中で育ち、江戸後期の古老人の言葉も耳にしているという特別な環境であったため、氏は各種の年代層の言葉の違いに敏感であり、語例や例文の使用年代、複数語形がある場合はそれ

*ご教示下さった話者の牧原登氏に厚く御礼を申し上げる。その紹介の労を取って下さった大野眞男、竹田晃子両氏にも謝意を表する。2019年7月の調査は両氏と一緒に行なった。本稿はJSPS科学研究費19H00530（代表者：窪薙晴夫）による研究成果の一部である。同時に、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」（プロジェクトリーダー：窪薙晴夫）、並びに「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（プロジェクトリーダー：木部暢子）の研究成果も兼ねる。査読者のコメントにより、説明を増やして分かりやすくすることができた。不統一を指摘してくださった編集委員にも感謝する。

らの概ねの使用頻度まで詳述¹してある本文 468 ページからなる大著である。ただし、アクセントの記載はない。今回の報告は、基本的には私のいつものアクセント調査表に基づくものであるが、一部はその方言集にある項目のアクセントも調べ、関連情報はその本を参照した点もある。

2. 表記

岩手県沿岸部の方言は、標準語の母音間の無声破音（破裂音・破擦音）に有声音が対応する北奥方言の特徴をもつが、同県内陸部とは異なり、母音間の有声破音に対応する前鼻音破音はなく、そのまま有声破音で現われる。そのため、標準語における母音間での無声破音 / 有声破音の対立ではなく、「鉢」と「恥」、「解いた」と「研いだ」はそれぞれ同音（hazi, toida）となる（筆者の母方言である岩手郡零石町方言——以下、零石方言——では、hazu と ha~zu, toida とtoi~da で区別する）²。ただし、ガ行鼻音（鼻濁音, -ng-）は極めて安定しており、「杉」（sungi）と「鋤」（sugi）

¹ 一例に「人によってどれも言われるが、大きく見ると「もち・もちい・もちいー」系が5割、「もず・もずう・もずうー」系が1割、それに「ぢ」と「づ」の中間音が4割あった」とある（p. 424）。本稿はできるだけ牧原氏の発音を記述したが、ここに述べた事情もあり、関連情報も有益であると考えて緩やかな記述をした。ただし、「中間音」は牧原氏の発音ではないと見て省いた。

² ただし、前鼻音に関連して次の語形が注意を引く（牧原 2014 からも抜き出して確認をした）。零石方言と対比させながら示す。アクセントは関与しないので略す。

	田野畠方言	零石方言
(a)	kapuk ^o keru (黴る) kapu ^o seru (被せる) kupita: (首 < 首玉とある) kupik ^o nori (肩車 < 首っこ乗り) jamapiko (やまびこ) micika (腰までの丈の短い仕事着) iciko (嬰兒籠) micupana (水漬)	ka~pu ^o keru (黴る) ka~pu ^o seru (被せる) ku~pita (首. 母音は短い) ku~pik ^o noru (肩車 < 首っこ乗り) jama~bigo, jama~biko, <聞> jama~pi ^o ko (やまびこ) mi~cu ^o ka (腰までの丈の短い仕事着) e~ci ^o ko (嬰兒籠。多忙時に乳幼児を入れておく藁籠) mi~cupana (水漬)
(b)	kuta (管) asita (足駄) garasuto (ガラス戸) hita (襞) huta (札) hute (筆) kipa (牙) kiparu (気張る) kupo (蜘蛛) kuparu (配る) kuperu (くべる) ku ^o po (窪) sipa (柴) sipasi (火箸) musipa (虫歯) mugasipanasi (昔話) siparagu (しばらく) siparu (縛る) s ^o puka: (渋皮) s ^o poru (搾る) supasikoi (すばしこい) superu (滑る) kiNcupa (菓子の金鍔)	ku~da (管) asu~da (足駄) garasu~do (ガラス戸) hi~da (襞) hu~da (札) hu~de (筆) ki~ba (牙) ki~baru (気張る) ku~bo (蜘蛛) ku~baru (配る) ku~beru (くべる) ku~bo (窪) su~ba (柴) hi~basu (火箸) musu~ba (虫歯) mugasu~banasu (昔話) su~baragu (しばらく) su~baru (縛る) su~bukawa (渋皮) su~boru (搾る) su~basukoi (すばしこい) su~beru (滑る) kiNcu~ba (菓子の金鍔)

など、零石と同様に -g- の対立は明瞭である（牧原 2014 でもキ°とギなどで区別している）。

一方でまた、岩手県沿岸北部の方言は、シとス、チとツ、ジとズの対立のある、いわゆる「非ズーズー弁」であることも前からよく知られており、田野畠村方言（以下、田野畠方言）もその一つである³。その結果、「道」(mizi) と「水」(mizu) は、母音の違いで区別されることになる（零石方言では mizu と mi~zu で、母音は同じになって子音で区別する）。

もっとも、suzu (筋), cuzu (土, ただし <m>cuzi), hizuzu (羊), suzugo (筋子), cuzucuma (辻榎), suzumu (沈む), suzugada (静かだ) など、前後を問わず隣に本来の su, cu, zu のある環境では同化によりその対立が失われている。suso (紫蘇) も、無声化を介して sso に近くなっているが、後続奥舌母音による部分同化であろう。また、単語によっては、mugasi, <m>mugasu (昔) のような個別併用例もある。併用はズーズー弁の影響によるものと見るが、その影響は上記の同化現象にも間接的に働いていた可能性がある。

cupo (壺)	cu~bo (壺)
hipa (桧葉)	hi~ba (桧葉)
hipo (紐)	hi~bo (紐)

等々である。これらの t や p はいずれも濁音のダ行・バ行に対応し、かつ直後か直前の母音が無声化するものであり、しかも零石方言では (a) (b) すべて前鼻音をもつのみならず、その直後の母音が無声化する環境 (a) では前鼻音付き無声破音で実現する。このことから考えて、(a) (b) の無声化の条件の違いと (b) の歴史的過程はなお考究の必要があるものの、田野畠方言でもかつて濁音は前鼻音をもっていたことは確實だと推定する。

濁音の前に撥音が出る以下の語例も注目される。これらの一一部は -N- の形で他から借用された可能性も否定できないにしても、全体として、やはり元は前鼻音をもっていたことの反映を見る。

kaNze:ru (数える), goNbo: (牛蒡), aNzugi (小豆), juNbe (夕べ), haNdasi (裸足), hiNdari (左), buNdo: (葡萄), goNdo: (大きなゴミ), deNb (額<出額), toNb (鳶) 等

ちなみに、関東地方のザブトン（座蒲団）の類や、茨城県の地名ミツカイドー（水海道）、同県の人名や地名のイツカ（石塚）も、元々あった前鼻音の反映であって、たとえば連濁を回避した形や過剰矯正形ではない、と私は予てから見ている。

³ これについての研究史と文献名は、大野眞男他（2016）の「解説」に譲る。同書には CD も添えられており、牧原氏ご自身、ならびに牧原（2014）の主要話者の音声を聞くことができる。

その「解説」には、ズーズー弁と非ズーズー弁の歴史的な前後関係に関する諸氏の論が列挙されていて参考になる。ただし、私見では「比較言語学の原則に従う限り、非ズーズー弁の方が史的に古い」ことは自明で、先行研究が記す限定留保は不要である。その区別をもたらす音韻条件がない限り、区別のない状態（ズーズー弁）から新たな分裂（非ズーズー弁）が生ずることはありえないからである。/su, cu, zu/ のズーズー弁と /si, ci, zi/ のジージー弁という、/si/ と /su/ 等の対立のない両体系が接触したところで、そこから対立のある非ズーズー弁が生ずることもありえない。

それとは全く別の視点で検討すべきは、非ズーズー弁地域もかつて一度ズーズー弁になったあとで、外部からの強力な標準語的非ズーズー弁の力が働いて今の形となった可能性である。しかし、その場合でも、あくまでも「その地域の近過去の歴史的変遷として」ズーズー弁の方が古いくことになるだけで、最初に述べた比較言語学の視点での新古の認定には何ら影響しない別の事柄である。この地理的接触の立場からの「古さ」の視点（今一つ付け加えると、文献上の出自の絶対年代に基づく「古さ」の視点）を比較言語学の「古さ」の視点と混同することが未だに絶えないのは残念なことである。歴史比較研究の視点については、拙論（1996: 32-34）なども参照。

外部から強力な標準語的非ズーズー弁の力が働いた可能性に話を戻すと、仮にそれが働いたとしても、なぜシ/ス、チ/ツ、ジ/ズの区別にだけ作用し、他の面、たとえば母音間の有声破音の無声化やアクセントの類別（特に 2 モーラ名詞第 2 類の有核化）には影響を与えたのかの説明が不可能である。また、それに比べると副次的であるが、盛岡市などの中心部を飛ばして、なぜこれらの地域にだけその力が働いたのかも疑問が残る。後者については、かつて海路を通して沿岸部に最初に文化的な影響を与えた可能性は検討に値するにしても、より根本的な前者の問題点の解決には繋がらず、従って、外からの大きな影響があったとする可能性も否定される。

母音の長短に関しては、複雑で微妙な問題が残るが⁴、その音声、アクセント、文中の機能、複合語の前部要素に現われる形、助詞付き形を参考にして、音韻的には長短の2項対立と解釈し、長い方に「:」を付した。併用形は、併記する他に、適宜「(:)」で示した。

以上により、本稿はほとんどローマ字表記の通りに読めばよい。注意を要するものについて、状況符号も含めて、記号類を(2)にまとめて示す。

(2) 記号類

ng：鼻濁音。ガ行鼻音ŋで、g (=g) とは区別される。

N：撥音のン。従って、Ngaはンガで、ngaのガ°とは異なる。Nngaはンカ°である。促音は子音を重ね、長音は、本来は「:」であるが、入力の関係でコロンで代用する。そのo:は1音節であるのに対して、monoogi（物置）のooはその間で音節が切れ、音声が異なる。

c：チ・ツの破擦音子音。caはツア、ciはチ、cuはツ、cjaはチャ。

。：無声化の印。

~：前鼻音。田野畠方言にはないが、対比する零石方言では~b, ~d, ~zがある。

広：広母音（厳密には、非狭母音）のe,o,aをもつモーラ。

狭：狭母音のi,uをもつモーラ。

○：母音の広狭などを問わない任意のモーラ。

<m>：稀。見出し語形の使用は稀でもそのアクセントが得られた場合は記し、日常語形も示す。

前出のmugasi,<m>mugasu（昔）は、mugasiが多数派だが、mugasuも少数ながらある意。

<n>：新。新しい単語・用法。

<o>：古。古い単語・用法、古老が用いていた単語・用法。

x：使わない意。その直後の語形は使わない意のときは、語形との区別のために<x>に。

<普>：こちらの方が普通、普段よく用いる形。

(OK)：私が観察・記録した限りにおいて、これで可であり、入力ミスにあらずの意。

^x：不適格な発音、否定される形。理論的にあったと想定される形に付す*とは区別。

⁴たとえば注1にも引いたように、「餅」は「もち・もちい・もちーー」と3段階に区別した表記が使われている。牧原氏の中ではそれが違うように意識されることで、実際に3つを並べて聞くと確かにその違いが聞こえる貴重な情報である。これらは「同一の人でも、話す相手の年代・気さくさの度合い・同郷人同士か他所から来た人か・話している場所等で、どちらも使い、または自由に使い分けている」（同書冒頭部分の「[「大芦ことば」記載に付いて]」）という。

問題は、ここから母音の長さに「短／長／特長」の3項対立のあるエストニア語のような体系と結論づけられるか、にある。なるほど、単語リストを読んでもらった場合であっても、他の項目でもwaza:(2)(技)やozja:(1)(お茶)のような形が他方言に比して頻出する。しかしながら、単独発話が半長形か長形かの認定判断がそもそも容易ではない。また、「ワザーカゲル」(技を掛ける)など、助詞なしで目的格(や主格)として使う場合ははっきり長くなるが、助詞モを付けると「ワザモ」で短くなるし、「オヂャーノム」でありながら、指小辞のコを付けるとオヂヤコと短くなる。格表示機能以外ではっきり長くなるのは、単語単独形を文末として用いた場合であって、ある種のイントネーションが被さっているものと解した。動詞の命令形や禁止形でも独特のゆらぎ音調がるので、それも含めて今後の課題とする。

ただし、「餅」は長母音形も頻繁に出る上に、複合語の前部要素でも、短い形が主ではあるがmozi:cugi(餅搗き), mozi:magī(餅捲き)も出、指小辞のコ付きの場合もmocikoの他にmozi:koも出るので、本稿ではmozi(:)とした。「りんご」のriNngomo, riNngo:moも同様である。

< : 右側の語形に由来。右側の語形から左側の語形に変化。

> : 左側の語形に由来。左側の語形から右側の語形に変化。

[: 音調の上昇（上げ）。同時に、/ 音韻表記 / における「昇り核」も示す。算用数字は語頭から数えたその核の位置。無核型は0とする。本文中では丸付き数字で示す。音韻表記の無核型は語形の直後に付した/=/で示す。なお、後半の史的変化では、=は不変化の意味で用いるが、文脈がはっきり異なる上に、前後に空白があることでも区別される。

] : 音調の下降（下げ）。

]] : 音調の拍内下降。語末にのみ出る。

[[: 音調の拍内上昇。

! : 半下降。]とは下降幅が異なる。本土祖体系ではその区別があったと見る（拙論2006）。

!! : 拍内半下降。

_ : アクセント単位の切れ目の印（常にではなく、必要に応じて記す）。

表中における金田一語類の数字：最初はモーラ数、次が「アクセントの類」で、そのxは「類未定」、zはその他の追加語彙を意味する。活用形の2a1などは、2モーラ動詞第1類で、aは1段動詞、bは4段動詞、c,dは特殊活用を意味する。2k2などのkは形容詞。

3. アクセント体系の概要

この方言は、モーラを単位とし、その数よりも1つ対立数の多い $P_n = n+1$ の体系である。3モーラ語の音調型を例として(3)に示す。語例の類別は、順に1, 4, 5, 6類である(6節参照)。

(3) 3モーラ語の音調型一覧

単独	～と	～の	～も	～から	～でも	この～
saga[na] (魚)	sagana[do]	sagana[no]	sagana[mo]	saganaga[ra]	saganade[mō]	ko[no]saga[na]
odo[go] (男)	odo[go]do	odo[go]no	odo[go]mo	odo[go]gara	odo[go]demo	ko[no]odo[go]
ko[go]ro (心)	ko[go]rodo	ko[go]rono	ko[go]romo	ko[go]rogara	ko[go]rodemo	ko[no]ko[go]ro
[su]zume (雀)	[su]zumedo	[su]zumeno	[su]zumemo	[su]zumegara	[su]zumedemo	ko[nosu]zume

基本的に高い部分は1モーラだけであるが、下降が遅れて次のモーラの途中で下がるように聞こえることがあり、時に2モーラ続けて高くなることもある。[ha]dage ~ [hada]ge (畑), [u]sangi ~ [usa]ngimade (兎まで)など。特に「田野畑」はta[no]hadaよりもta[noha]daの方が安定して現われるくらいである。ta[nohada]mura (村), [osikat]tara (惜しかったら)なども記録してある。昇り核に移行した段階と認められる。有核型が密に結びつくと連続下降が起こる。si[ro]guna]ru (白くなる)などで、元は下げ核であったことを反映する名残りと見る(詳細は拙論1989: 203, 1992, 2017b: 71–72, 2020bなどを参照)。かくて、(3)は共時音韻的に/sagana=/, odo[go], ko[goro], [suzume/と解される。それぞれ①型, ③型, ②型, ①型である。後続の資料表はこの数字で示す。

無核型と語末核型は、単独では区別がないと聞いた。助詞を付けるとはっきり区別が現われる

(この助詞付き言い切り形に出る有核型の下降も、かつての下げ核の名残りである)。無核型は、文節末のモーラのみが高くなる。ただし、助詞の「まで」は核をもつと見られ、無核型に付くと sagura[ma]de (桜まで) のようになる。また、「この」などの無核型に後続する語は、語頭核 (頭高型) を除いて低く付く (「あの、その」も同じで、「どの」は①型)。それ以外の発音がないかは未確認ながら、自らの音調型を保持する現象が他にも観察されている。sagana[do]ni[gu] (魚と肉), sagana[no]ne[da]N (魚の値段), sagana[mo]cure[da] (魚も釣れた), saganaga[raku]: (魚から食う) などである。最後の例は、^xsaganagara[ku]: や^xsaganaga[ra]ku]: にはならない。

このことは、語末核名詞の副詞的用法のアクセントを調べる際にも関係する。asi[ta]mo (明日③も), kiNno[:mo] (昨日④も) に対して、当初の調査表で用意していた文例, asi[ta]i[gu] (~行く), kiNno[:ki][ta] (~来た) では判定不可能で, asi[taku]ru (~来る), kiNno[:mi]da (~見た) でもって初めて副詞的用法では無核化することが確かめられる。

名詞を主語や目的語にした文を作ると、「が」や「を」は普通使わず、名詞の語末が長音化する。hana[:ka]mu (鼻①をかむ), mizu[:no]mu (水①を飲む), ha[na]:sa[gu] (花②が咲く), [a]me:[hu]ru (雨①が降る), ka[:i]ru (蚊①がいる), hi[:de]da (日①が出た), [hi]:ke[se] (火①を消せ) など。これらの hana[:], ka[:], 等は、丁寧な発音では最終モーラだけが卓立するが、しばしば長音を含む音節全体が中程度に始まって上昇したり、稀に ha[na:], [ka:] と音節全体が高く平らに聞こえたりすることさえある。これは無核型に限らず、特殊拍終わりの語末核でも起こることがある。

4. 特殊モーラが核を担う

前節にもすでに例示したが、田野畠方言アクセントの特徴として、特殊モーラ (特殊拍、モーラ音素) が核をもつ点があげられる。(4) を参照。とりわけ、長音にそれが目立つ。活用形では、-ru で終わる無核動詞の禁止形において撥音が規則的に核をもつ。/ki[runa] (着るな), u[runa] (売るな) / などの /-[ルナ/ の核が、ルが同化でンとなっても /ki[Nna], u[Nna]/ ②のまま保持されているものである。これらは、撥音の1つ前に核がくる有核動詞の /to[Nna], ta[deNna] / < /toruna, ta[deruna/ (取るな, 建てるな) などと対立する。長音でも、/wara[:na]/ ③ (笑うな) は /ha[ra:na]/ ② (払うな) と区別され、/o[mo:, o[mo:ba]/ ② (思う, 思えば) に対し /omo[:ne:/ ③ (思わない) の区別がある。

(4) 特殊モーラが核をもつ例 (核表記)

②型 : /ka[: (皮), sa[: (沢), to[: (十), na[: (縄, 綱), he[: (堀), me[: (姪 Cf. [me: 前), jo[: (用), ro[: (蠍), je[: (家), ke[:ko (貝殻), ke[:na (腕), ka[:ra (瓦), de[:go (大根), ho[:ke (頬 Cf. 雪石方言 [hokke]; jo[i (酔い, 結い=相互扶助); i[N (犬); ka[:na (買うな); ki[Nna (着るな), ne[Nna (寝るな), su[Nna (するな), u[Nna (売るな); ke[:ru (帰る), to[:su (通す), to[:ru (通る), me[:ru (参る, 見える) / など

③型 : /awe[: (間), sumo[: (相撲), dozjo[: (泥鰌), hiri[: (昼飯), juwe[:;, iwe[: (祝), zado[: (座頭, 盲); <n>nio[i (匂い); kemo[N (獣); wara[:na (笑うな); kise[Nna (着せるな),

ogu[Nna (送るな) ; kode[:ru (答える) / など

- ④型 : /aNbe[: (塩梅), irope[: (色 Cf. 零石 i[roppe), uraka[: (裏側), ke:do[: (街道), goNdo[: (大ゴミ < ゴミどころ), <o>zINzjo[: (人形), mekkō[: (盲), moNpe[: (もんぺ), <o>riNgō[: (りんご); amimo[N (編み物), kedamo[N (獣), degimo[N (出来もの), niNzi[N (人参), se:ba[N (菜板 = まな板) ; kuwe[:ru (咥える), kaNze[:ru (数える) / など
 ⑤型 : /kibicjo[: (急須) /

参考までに、特殊モーラに終わる無核型の例も、(核ではなく) 音調そのもので表記すると、ka[: (川), 買う), ku[i (杭), guwe[: (具合), name[: (名前), mugo[: (向こう), huto[N (布団), bue[N (生魚 < 無塩), baNnge[: (晩), he:ke[: (稗粥), minginga[: (右側), jorije[: (寄合), wekka[: (上側), bokku[i (棒杖), jo:ha[N (夕飯) などである。

5. 指小辞「こ」の付いた形のアクセント

牧原 (2014: 140) の「こ」の項目には、「生活に親しい語」に付けられる指小辞の例があげられている。名詞のアクセント規則の一環としてそれを調べた結果を、無核型と語末核型に分けて(5)に示す。各型内の掲載順も見出しの仮名表記も原文のままであるが、調査時に得た追加情報は本稿での表記で示す。()内は「こ」の付く前の単語とそのアクセント。ただし、原文では【自然】【家】などに意味分類されているが、その枠は省いた。「馬の子っこ、兎の子っこ」なども並ぶが、これらは2アクセント単位形で前は切り離されるので、すべて「子っこ」にまとめた。

(5) 指小辞付き形のアクセント

無核型 : いしこ (石①), かわこ (川①), みずこ (水①, micuko も), ゆがこ (床①), とっこ (戸①), にわこ (庭①), さらこ (皿①), どなべこ (土鍋①), おづげこ (味噌汁①), なしこ (梨①), さがなこ (魚①), ほどこ (ほど①, ジャガイモ), えんぴづこ (鉛筆①, eNpicuko も), けしごむこ (消しゴム①, kesikomu も), したじきこ (下敷き①, sitazigiko も), からだこ (体①), けつつこ (尻①), はなこ (鼻①), くちこ・くちこ (口①), よめこ (嫁①), べごっこ (ベゴ①, 牛), こっこ (子①), きもちこ (気持ち①, kimociko も), はぎものこ (履物①), たぎーこ (OK. 薪①), いしゃこ (医者①, <o>isa), まちこ (町①, maziko も), しけんこ (試験①)

語末核型 : やまこ (山②), さーこ (沢②), いえーこ (je: 家②), ざしきこ・ざしきこ (座敷③), なべこ (鍋①), へらこ (籠①), しゃぐしこ (杓子②), はしこ (箸①), ちゃわんこ (茶碗①), しるわんこ (汁椀②), おろしこ (卸③), セーばんこ (菜板④, まな板), こっぷこ (コップ①), どんぶりこ (丼③), まんまこ (まんま①, 御飯), にぐこ (肉②, nikuko も), やさいこ (野菜②, jase: も), なっぱこ (菜っ葉③), いもこ (芋②), みそこ (味噌①), こめこ (米②), あわこ (粟①), むきこ (麦①), こっこ (粉①), しょーゆこ (醤油③), すっこ (酢①), りんごこ (林檎③, riNgokko, riNgoko も), くりこ (栗②), こめのこっこ (米の粉④), さどーゆっこ (砂糖湯④), ほんこ (本①),

まんねんひづこ (万年筆③, maNneNhicuko も), きょうかしょこ (教科書③), あだまこ (頭③), はらこ (腹②), うでこ (腕②), みみこ (耳②), ほっぺだこ, ほっぺたこ (頬っぺだ, 頬っぺた③), はっこ (歯①), おどなこ・おどなっこ (大人①), むごこ (婿①, mugokko も), わらしこ・わらすこ (わらし③, 子供, -si が主), ねごこ・ねごっこ (猫①), うまこ・うまっこ (馬②, makko は不可らしい), うさぎこ (兎①), ちからこ (力③), きものこ (着物③), はだきこ (肌着②), ゆっこ (湯①), じどーしゃこ (自動車②), ばしゃこ (馬車①), ふねこ (船①), めんどーこ (面倒③)

(5) から、分節音については、1モーラ形態素に終わる単語と「こ, ご (go)」終わりの単語に付くときは「っこ」となり（例外の併用「大人っこ, 馬っこ」は借用か）、「ぎ, ぢ (「じ」との音韻的区别なし）」に「こ」が付くときは「きこ, ちこ」ともなるのが原則であることが分かる。

本稿の主題のアクセントに関しては、「無核型に「こ」が付いた形は無核型, どこに核があろうと有核型に付いた形は語末核型になる」という規則がある。例外は、牧原語彙では「ほんぼ」①（乳幼児）と「ほんぼこ」②, 私の調査語彙では「間」の awe: ③に対して awe:ko ②ぐらいである。「鬼②」に対しては oniko に①と③がともに出て揺れるので、この観点から再調査したところ, ①型は「鬼ごっこ」の意の独立した別語, ③型は「鬼」の指小辞形であることが判明した。他に umabanako ④（馬花こ, あやめ）も語末核ではないが、これはコ付き形でしか使わない由。

ところで、北奥方言は有核 / 無核の広義の式保存法則が成り立つことを知っている人には、(5) の規則は当然のことのように思われるかもしれない。しかし、方言によっては、それが(5)の形で成り立つとは限らない。零石方言では、同じ②型の「山, 花, 栗; 玉, 犬, 腕」でも、jamakko, hanakko, kurukko は②型なのに対して、tamakko, inukko, u~dekko は④型になるのである。東京方言や田野畠方言で①型の「稻, 船」は零石方言では②型であるが、これも inekko ④に対して hunekko ②である。有核 / 無核はまず揺れず、有核型は語末核型が多いものの、その核の位置は個別に指定するしかない。指小辞付き形から逆方向の予測もできず、sagakko ②でありながら saga ①（坂）である。さらには、ごく稀ではあるが、uda ②（歌）に対する udakko ①, cukara ③（力）に対する cukarakko ④のような核の有無の例外もある（これは借用で説明できる。拙論 2017a: 4–5 を参照）。

また、分節音でも、零石方言では上記の例のように「っこ」と促音が入るのが普通であるが、keccu ①（けつ, 尻）, heccjo ①（臍）のような促音を含む単語にはその重複はなくて keccuko ①, heccjoko ①になる。waN ①（椀）など、「ん」で終わる単語にも「ンッ」の連続を避けて waNko ①と「こ」だけが付く。また、語末が前鼻音化有声音 + 狹母音（標準語の濁音狭母音音節）で終わる単語（「水, 株, 首」など）は、「っこ」を付けると mi~zukko のようにそのまま実現するが、促音のない「こ」を付けると mi~cuko, ka~puko, ku~piko と無声前鼻音となる。古い世代では、「風っこ」などでも ka~cjeko が可能である。これらはすべて無核型の例であるが、アクセントは無関係で、ka~zu ①（火事）でも ka~cuko ③となり、su~zu ①（幼児の陰茎）では su~cuko ①となる（ここでも核の位置は予測できない）。標準語の清音音節に当たる非前鼻音化有声音 + 狹母音に終わ

る単語の kagi ①(柿), kuzu ②(靴)などには「っこ」の付く kagikko ①, kuzukko ④が普通であるが、促音のない「こ」を付けると kakiko ①, kucuko ③となる。ただし、後者の無声化形は全般的に古臭く、私は年寄り相手にしか使わない。このような方言差ゆえに田野畠方言も詳述した。

6. 名詞の類別体系

金田一類別語彙に基づく名詞類別体系は、1モーラ名詞は 12/3 (その型は①型/①型), 2モーラ名詞は 12/3/45 (①型/②型/①型), 3モーラ名詞は 123/4/5/67 (①型/③型/②型/①型) である (「/」は区別の意)。なお、特に 3モーラ名詞は、類の認定自体に加えて、借用語の問題が絡んでいて複雑になっているが、下記に取り上げる点を除き、今は細部に立ち入らない。

2モーラ名詞 4・5類が田野畠方言でまず目につく。母音の広狭という環境を問わず、「秋、雨」などはもとより、「板、糸；鮒、聾」などの「狭広」でも、ほとんど①型で出る点である (零石方言は「狭広」の単語は②型で出る)。以下、詳しくは稿末の表 1 の資料を参照されたい。

例外は「管② (kuta (OK)), 桁②, 外②, 杖②; 蜘蛛② (kupo (OK)), 露②」ぐらいである (「桁」は最初①を記録)。「管、蜘蛛」は第 1 母音が無声化するようになってから、その無声化が①>②の変化を引き起こしたものと見る。他は、目の粗い私の分布調査によれば、「外②」は零石・盛岡・九戸郡洋野町・上閉伊郡大槌町に、「杖②」は北部を除く零石・盛岡・大槌・釜石に、「露②」は北部の洋野町にそれぞれ分布し、その地域的な影響によるものであろう。

もっとも、この一帯でこの 4・5類に①型が出ることは平山輝男 (1957: 450) 以来知られていて、佐藤喜代治 (1966), 森下喜一 (1982), 森下喜一編 (1986) は地理的分布も扱っている。佐藤 (1966) は田野畠村の海側の島越を対象としているが (話者は大正 12 年生), 牧原氏によれば、そこは浜岩泉・大芦とは学区が別で、方言にも多少違いがあるという。その「苗」は②型とある。一方、平山 (1957) と森下 (1982, 1986) は、田野畠村の隣の岩泉町を対象としており、その「露」は①型とある。本稿は地域差・方言差を狙いとするものではないが、それを扱う際にはこの調査地点の違いに留意する必要がある。理論的推定である「語類」も、本稿は原則的に金田一語類 (とそれを改訂した拙論 2006) に拠っているが、平山語類 (森下論文はこれに拠る) も、東北大学の語類も、さらには早稲田語類も、相互に異なる点がある。ただし、ここではそれに立ち入らない。

3モーラ名詞 6・7類は 2モーラ名詞 4・5類以上に注目される。私が調べた範囲では (6) のようにほとんど①型になっており、例外は (7) だけだからである。なお、金田一語類にありながら、よく使う方言形が別にあって伝承形ではなかろう、ないし、日常口頭語としては使わない可能性が高い、と見た項目は調査表から省いていたが、念のために確認調査をしたところ、第 6 類の「蛙」は kaeru ①だが、元は bikki ①か huruda ① (墓蛙) と言った; 「誠」は「誠を尽くす」などの普通名詞では普段使うことがなく、人名にあれば②で言う程度; 金田一が元は第 6 類に入れていて今は第 1 類の「操」もこの点は全く同じで、「操を守る」は文章語であり、人名にあれば②; 第 7 類の「千鳥」は縁もなく不使用、とのことであった (本節後半に引く森下編 1986 の

項目も比較参照)。

(6) 3 モーラ名詞 6・7 類で①型で出る語

- 3-6: 兎, 鰻, 大人, 鳥, 狐, すすき (<o>kaja 1), 雀, すもも, 背中, 高さ, 団子, 田んぼ, 燕, 長さ, 鼠, 裸, 裸足 (haNda:si), 左 (hiNdari), 蚊 (memezu), 蓬 (jumungi)
 3-7: 莓, うしろ, 蚕 (kaigo, <o>to:dogo 4), 奄, 辛子, 鯨, 薬, 卵, たらい (tare:), <m> 椿, 鉛, 畑, 病 (jaNme:)

(7) 3 モーラ名詞 6・7 類で①型以外で出る語 (6 類; 7 類の形で示す)

①型: 広さ; 便り

②型: あやめ, 虱, <m> ひばり; 一つ, 一人, <m> 緑

これを見ると、(7) の②型は、「あやめ」を除いて「○広狭」, すなわち, 第2モーラの母音が広く, 第3モーラの母音が狭い例である。音配列の対比上から第2モーラが強いこの環境において, 第1モーラにあった核が右側 (語末寄り) に移動したと考えられる。特に「一つ, 一人」は語頭音節の無声化が積極的に関与したに違いない。その一方で、「○広狭」の例であっても、「ひばり」は生活圏ではなく、「緑」も本来は「青」で表現していた。「あやめ」も, 改めて聞いてみると, umabanako ④ (馬花こ) と言っていたという。これらは借用語と見られる。そうなると、「虱, 一つ, 一人」がこの変化を受けたことになる。同じ音配列条件下にありながら「兎, 鉛」は①型であることが問題となるが, hasira (柱③), usso < *usiro (後ろ①) から見て、「虱」のシもラ行音の前で無声化していて, それが変化を引き起こした可能性も考えられる。

一方, 無核型で出る中で「広さ」は, 東北一帯で形容詞「広い」が無核型であることと関係する。「便り」については未詳だが, 隣の岩泉町も①型である (本節の次末段落を参照)。

借用に関連して言えば、「蚕」①型は, to:dogo ④ という方言形がある (零石方言でも元は todokko ②で「尊う子」らしい) ことから借用語で, その音構造から①型で取り入れたものを見る (第2モーラが弱い構造は①型を取りやすい)。前述のように bikki ①と言っていた今の「蛙」もまた, 同じく①で取り入れられた (零石も bikki ただし③で, 新しい「蛙」はやはり①)。「田んぼ①」も, 単に「田①」が農家の日常語であった。「すすき」も含め, 対応形と見えるものであっても借用語である可能性を排除できないのである。なお, 「団子」はそもそも借用語の可能性も高い。

その一方で, 「手①」には「手っぴ①」という方言形もあるが, 後者は人間の手の卑語か鳥賊・蛸の手足を指すという偏った意味で使われる明らかに派生的な用法であり, 基礎語彙中の基礎語彙である「手」はそれとは無関係に日常語として伝承されてきたに違いない。この例は自明な場合であるが, 一般に方言形の存在が直ちに他の語形の伝承を否定するものではなく, 史的研究における借用語の扱いの難しさがここにある。

参考までに, 類別の差異には拘らずに具体的な単語レベルで佐藤 (1966) の3モーラ語を見るところ, 田野畠村島越は, 「便り」①, 「病, 緑」①である点が本稿と異なる。そして「兎, 鰻, 狐,

雀, 背中, 鼠, 蚊蝶, 烏; 葉, 便り」の①型（ただし下げ核とする）は、「ほぼ久慈以南の海岸部と内陸部の上有芸, 岩泉, 釜津田【いずれも岩泉町】に分布している」(p. 35) とする（「烏」は田野畠村も①）。同様に森下編（1986: 603–605）では、隣の岩泉町で①型でない例は「ひばり, 誠, 操; 盆, 椿, 病」が②型、「便り」は①型である（「椿」は田野畠でも最初②を記録した）。

田野畠方言の3モーラ語①型の多さは、むしろ秋田との県境にある零石方言と比べた方が一層よく分かる。零石では、「広さ①」と「うしろ③」を除き、(6) (7) の第2モーラが弱い「○狭広」か「○特○」(特=特殊拍)のみ①型で、そこが強い「○広○」か「○狭狭」の単語は②型であるのである（拙論 2017a）。相対的な「強」と「弱」が音調変化に関与する様相は第7節を参照。

それと関連する4モーラ語の調査語例はまだまだ少ないが、田野畠村の②型に対応して、第3モーラが強いときに零石では③型が出る(8)の例が目を引く。他に、第2モーラが弱い「コスモス, 松茸, 蜜蜂」は両方言とも①型であるのに対して、そこが強い「葉屋, やまびこ」の例は、田野畠①型に対して零石は②型なのである。同じ傾向は、用言の活用形においても見られる。

(8) 田野畠方言②に零石方言③が対応する4モーラ語例

朝顔, 井戸堀り, 稲扱き, 篓, 木ねずみ (リス, 「鼠」も①対②), 座蒲団, 手拭い, <n>はまぐり, 歯磨き, 田野畠 (地名), 牧原 (人名), zi[gunasi (意気地なし, 零石 zugu[nasu])

7. 北奥方言アクセント祖体系

拙論 (2020b) では、岩手県零石町・盛岡市を中心とする南部方言と、青森市・弘前市を中心とする津軽方言とを対象にしてそのアクセント祖体系を考え、本土祖体系からそれぞれに至るまでの変化を描いてみた。それが(9)である。ただし、その型の語例が少なくて今回の調査表に入っていないものは論旨に関わらないので省いた。以下、「>」は規則的アクセント変化、「=」は不变化、「→」は「酢, 歯」などに引かれて起こった非音韻変化を意味する（分節音は不問）。

(9) 本土祖体系から北奥祖体系へ(拙論 2020b に音環境を一部補い, > の入力ミスを1つ正した)

類	本土祖体系	<1>	<2>	<3>	北奥祖体系
1-1	*[蚊!!]	=*[蚊!!]	>*[蚊	=*[蚊	=*[蚊
1-2	*[葉]]	>*[葉!!]	>*[葉	=*[葉	=*[葉
1-3	* 木	=* 木	>*[木]]	=*[木]]	=*[木]]
1-4	*[[巣	=*[巣	>*[巣	=*[巣	→ *[巣]]
1-5	*[[歯]]	=*[歯]]	>*[歯]]	=*[歯]]	=*[歯]]
2-1a	*[カ!ゼ	=*[カ!ゼ	>*[カゼ	>* カ[ゼ	=* カ[ゼ
2-1b	*[ミ!ゾ]	>*[ミ!ゾ	>*[ミゾ	>* ミ[ゾ	=* ミ[ゾ
2-2	*[オ]ト	>*[オ!ト	>*[オト	>* オ[ト	=* オ[ト
2-3	* ヤマ	=* ヤマ	>*[ヤ]マ	>* ヤ[マ]]	=* ヤ[マ]]

2-4 * フ[ネ]	= * フ[ネ]	> * フネ	> *[フ]ネ	> * フ[ネ]] (狭広)
2-4 * ソ[ラ]	= * ソ[ラ]	> * ソラ	> *[ソ]ラ	= *[ソ]ラ (上記以外)
2-5 * フ[ナ]]	= * フ[ナ]]	> * フナ	> *[フ]ナ	> * フ[ナ]] (狭広)
2-5 * ア[メ]]	= * ア[メ]]	> * アメ	> *[ア]メ	= *[ア]メ (上記以外)
2-6 *[[ゴマ	= *[[ゴマ	> *[[ゴマ	> * ゴ[マ	= * ゴ[マ
3-1a *[サカ!ナ	= *[サカ!ナ	> *[サカナ	> * サ[カナ	> * サカ[ナ
3-2 *[ア!ヅ] キ	> *[アヅ!キ	> *[アヅキ	> * ア[ヅキ	> * アヅ[キ
3-3 *[チ] カラ	> *[チカ!ラ	> *[チカラ	> * チ[カラ	> * チカ[ラ
3-4 * オトコ	= * オトコ	> * オトコ	> * オ[トコ]]	> * オト[コ]]
3-5a * イノ[チ	= * イノ[チ	> * イノチ	> * イ[ノ]チ	= * イ[ノ]チ
3-5b * アサ[ヒ]]	= * アサ[ヒ]]	> * アサヒ	> * ア[サ]ヒ	= * ア[サ]ヒ
3-6 * ウ[サギ	= * ウ[サギ	> * ウサギ	> * ウサギ	> * ウ[サ]ギ (下記以外)
3-6 * キ[ツネ	= * キ[ツネ	> * キツネ	> * キツネ	= * キ[ツネ (○弱○)
3-7a * ク[スリ]]	= * ク[スリ]]	> * クスリ]]	> * クスリ	> * ク[ス]リ (下記以外)
3-7b * カ[ブ] ト	= * カ[ブ] ト	> * カブト]]	> * カブト	= * カブト (○弱○)

拙論（2020b: 25）の注3に断わったように、これはあくまでもそこで対象とした方言に関して理論的に想定した祖体系であり、岩手県洋野町（旧種市町）方言などのアクセントも含めれば北奥祖体系はさらに一段階遡りうことになる、としておいた。今回対象とした田野畠方言は、第6節で見たように、3モーラ名詞6・7類において洋野町方言よりもさらに古い側面を残していると考える。すなわち、2-4と2-5、3-6と3-7が(9)の<3>の段階にあるのである。

その意味で、(9)の<3>の段階までほぼそのまま北奥祖体系を遡らせればよいことになるが、田野畠村のデータをよく見ると、一部微修正が必要となる。田野畠方言の段階に至るまでに、(9)の<3>のサ[カナ]とオ[トコ]]という、上昇の遅れの余裕のある型において、それぞれサカ[ナ、オト[コ]]となった段階を考える必要がある。つまり、(10)となる。(なお、田野畠の「力」は③型——私にも起こっている恐らく新しい変化——なので「小麦」の例で示す。)

(10) 本土祖体系から北奥祖体系へ（微修正案）

類	本土祖体系	<1>	<2>	<3>	北奥祖体系	<4>
1-1 *[蚊!!	= *[蚊!!	> * 蚊	= * 蚊	= * 蚊	= * 蚊	
1-2 *[葉]]	> * [葉!!	> * [葉	= * [葉	= * [葉	= * [葉	
1-3 * 木	= * 木	> * [木]]	= * [木]]	= * [木]]	= * [木]]	
1-4 *[[巢	= *[[巢	> *[[巢	= *[[巢	→ *[[巢]]	= *[[巢]]	
1-5 *[[歯]]	= *[[歯]]	> *[[歯]]	= *[[歯]]	= *[[歯]]	= *[[歯]]	
2-1a *カ!ゼ	= *カ!ゼ	> *カゼ	> * カ [ゼ	= * カ [ゼ	= * カ [ゼ	
2-1b *ミ!ゾ]]	> *ミ!ゾ]]	> *ミゾ	> * ミ [ゾ	= * ミ [ゾ	= * ミ [ゾ	

2-2 * [オ]ト	> *[オ!ト	> *[オト	> * オ [ト	= * オ [ト	= * オ [ト
2-3 * ヤマ	= * ヤマ	> *[ヤ]マ	> * ヤ [マ]]	= * ヤ [マ]]	= * ヤ [マ]]
2-4 * フ[ネ	= * フ[ネ	> * フネ	> *[フ]ネ	= * [フ]ネ	> * フ[ネ]] (狭広)
2-4 * ソ[ラ	= * ソ[ラ	> * ソラ	> *[ソ]ラ	= * [ソ]ラ	= * [ソ]ラ (上記以外)
2-5 * フ[ナ]]	= * フ[ナ]]	> * フナ	> *[フ]ナ	= * [フ]ナ	> * フ[ナ]] (狭広)
2-5 * ア[メ]]	= * ア[メ]]	> * アメ	> *[ア]メ	= * [ア]メ	= * [ア]メ (上記以外)
2-6 * [[ゴマ	= * [[ゴマ	> * [ゴマ	> * ゴ[マ	= * ゴ[マ	= * ゴ[マ
3-1a * [サカ!ナ	= * [サカ!ナ	> * [サカナ	> * サ[カナ	> * サカ[ナ	= * サカ[ナ
3-2 * [ア!ヅ]キ	> * [アヅ!キ	> * [アヅキ	> * ア[ヅキ	> * アヅ[キ	= * アヅ[キ
3-3 * [コ]ムギ	> * [コム!ギ	> * [コムギ	> * コ[ムギ	> * コム[ギ	= * コム[ギ
3-4 * オトコ	= * オトコ	> * [オト]コ	> * オ [トコ]]	> * オト[コ]]	= * オト[コ]]
3-5a * イノ[チ	= * イノ[チ	> * [イ]ノチ	> * イ[ノ]チ	= * イ[ノ]チ	= * イ[ノ]チ
3-5b * アサ[ヒ]]	= * アサ[ヒ]]	> * [ア]サヒ	> * ア[サ]ヒ	= * ア[サ]ヒ	= * ア[サ]ヒ
3-6 * ウ[サギ	= * ウ[サギ	> * ウサ[ギ	> * [ウ]サギ	= * [ウ]サギ	> * ウ[サ]ギ(下記以外)
3-6 * キ[ツネ	= * キ[ツネ	> * キツ[ネ	> * [キ]ツネ	= * [キ]ツネ	= * [キ]ツネ (○弱○)
3-7a * ク[スリ]]	= * ク[スリ]]	> * クス[リ]]	> * [ク]スリ	= * [ク]スリ	> * ク[ス]リ(下記以外)
3-7b * カ[ブ]ト	= * カ[ブ]ト	> * カブ[ト]]	> * [カ]ブト	= * [カ]ブト	= * [カ]ブト (○弱○)

そうなると、田野畠方言は、(10) の北奥祖体系から、2-3 の * ヤ[マ]]、3-4 の * オト[コ]] の語末の下降調が、下降の遅れという一般的な音調変化により消えた結果ヤ[マ]]、オト[コ]] になり、また、3 モーラ語の第6・7類という *[○]○○型においては「狭広狭」の無声化構造の単語(「一人」など)で○[○]○型への変化が生じて分かれた、ということになる。

零石・盛岡方言と津軽方言は、北奥祖体系から<4>の段階になり、田野畠方言とは別の歩みをすることになった。そのあと、津軽においては2モーラ名詞の第4・5類で「広広」の音構造の単語(「空、雨」など)に*[○]○>○[○]]の変化が生じた。その結果、<4>の段階では「[狭広」以外」とまとまっていた*[○]○の内の「広広」のものが狭[広]]と合流して○[広]]となり、元のまま残った「松、猿」などの[○]狭とは分裂することになった。一方、零石・盛岡方言では、無核型の語末を含む文節末の上昇が消えて「蚊、葉、風、溝、音、胡麻、魚、小豆、小麦」(および、それに無核助詞の付いた形)が低平調になる変化が生じたことになる。

祖体系以降の上記の変化について、該当部分のみを抜き出して(11)(12)に図示する。ここは時系列の変化ではなく、中央が祖体系で、それから左右に分岐したことを意味する。少しでも関係が見やすいように(11)と(12)を<4>の位置で揃えてみた。(12)の2-4と2-5等はまとめても構わない。

(11)	田野畠方言	北奥祖体系	<4>	
2-3	ヤ [マ]	< * ヤ[マ]]	= * ヤ[マ]]	
3-4	オト [コ]	< * オト[コ]]	= * オト[コ]]	
3-6・7	ヒ [ト]リ	< *[ヒ]トリ	> * ヒ [ト]リ	
(12)	雪石・盛岡方言	津軽方言	<4>	
1-1	蚊	< *[蚊	= [蚊	
1-2	葉	< *[葉	= [葉	
2-1a	カゼ	< * カ[ゼ	= カ[ゼ	
2-1b	ミヅ	< * ミ[ヅ	= ミ[ヅ	
2-2	オト	< * オ[ト	= オ[ト	
2-6	ゴマ	< * ゴ[マ	= ゴ[マ	
2-4	フ[ネ]]	= * フ[ネ]]	= フ[ネ]] (狭広)	
2-4	[ソ]ラ	= *[ソ]ラ	> ソ[ラ]] (広広)	
2-4	[マ]ツ	= *[マ]ツ	= [マ]ツ (○狭)	
2-5	フ[ナ]]	= * フ[ナ]]	= フ[ナ]] (狭広)	
2-5	[ア]メ	= *[ア]メ	> ア[メ]] (広広)	
2-5	[ア]キ	= *[ア]キ	= [ア]キ (○狭)	
3-1	サガナ	< * サカ[ナ	= サカ[ナ	
3-2	アズキ	< * アズ[キ	= アズ[キ	
3-3	コムギ	< * コム[ギ	= コム[ギ	

8. 用言活用形のアクセント

さて、再び記述に戻る。用言の基本形は、田野畠方言でも無核型と次末核型の2つが主流であるが、その活用形においてもこの方言は古い特徴を見せる。紙幅の関係で活用形資料の表2には3モーラ語までを示した。

動詞では、第4節で見たように、無核型禁止形がナの前に核をもつ。これは青森県八戸市にもあり（拙論 2020a: 42）、洋野町にもあるので三陸海岸沿いに連続している可能性が高い。内陸部では /kiru[na, warau[na/ (着るな, 笑うな) などナに核をもつ。沿岸部の方が古い型と考えられる。

有核型動詞過去形（タ形）と連用形（テ形）のアクセントでも、(13) のような型をもつ。無声化が関与する例を除けば、活用タイプを問わず一貫している。3モーラ以上では、-ta/-da, -te/-de の2モーラ前に核がくるのが原則であるが、「歩く, 入る」はさらに前にくる（「あり行く, 這ひ入る」の複合動詞由来のためであろう）。(13) 以下の（ ）は終止形で代表させる。

(13) 動詞過去形と連用形のアクセント（核表記）

[deda, [dede (出る), [mida, [mide (見る), ただし ki[ta, ki[te (来る) ;
 [atta, [atte (会う), [utta, [utte (打つ), [kaida, [kaide, <o>[ke:da, [ke:de (書く), [totta, [totte (取

る), [joNda, [joNde (読む), [dasita, [dasite (出す);
[tadeda, [tade(de (建てる), [nobida, [nobide (伸びる), ただし hu[keda, hu[kede (老ける);
[aritta, [aritte (歩く), [he:ttta, [he:tte (入る);
o[joida, o[joide (泳ぐ), sa[ngatta, sa[ngatte (下がる), ta[noNda, ta[noNde (頼む), ha[ratta,
ha[ratte (払う), ka[gusita, ka[gusite (隠す); na[ngareda, na[ngarede (流れる)

これらの例、とりわけ /tadeda, [tade(de, [nobida, [nobide/ の①型は貴重である。②型で出る内陸部では見られない形だからである（拙論 2020a: 43）。ただし、これについても、平山輝男（1957: 465）に「宮古市・九戸郡長内町【おさないまち、現久慈市】など岩手県の海岸寄りのうち、ほぼ中部以北の方言」には、「[起] キタ, [起] キテ, [落] チタ, [落] チテ, [逃] ゲタ, [逃] ゲテ, [晴] レタ, [晴] レテ」の東京方言と同じになる例がある、との記述がすでにある（表記変更）。それと地理的に連続するものに違いない。

有核動詞の否定形（ナイ形）にも、内陸部には見られない型が出て来る。(14) である。いずれも、-ne: の 1 モーラ前に核がくる。ただし、有核のラ行動詞の -ラ- が撥音化する場合は、さらに 1つ前にずれる（この点でも東京方言に似ている）。内陸部では -ne: に核がくる（拙論 2020a: 42）。

(14) 動詞否定形のアクセント（核表記）

[dene: (出る), [mine: (見る), [kone: (来る); a[:ne: (会う), to[rane: (取る); ta[dene: (建てる), de[gine: (出来る); ojo[ngane: (泳ぐ), sanga[rane: (下がる); ari[gane: (歩く), kagu[sane: (隠す), he:[rane: (入る); kode[:ne: (答える), kodowa[rane: (断わる) など。 Cf. [toNne: (取る), sa[ngaNne: (下がる), he[:Nne: (入る), kodo[waNne: (断わる) など。

無核用言連体形には、変わった現象が見られる。有核動詞に「とき②」が付く場合は（以下、音調表記）、予想される 2 単位形の音調型 [ka]gu_do[gi] で問題ない。しかし、無核動詞に付く場合は、kirudo[gi, kitto[gi (着る時、-ルは促音形との併用), kitado[gi (着た時) のようになり、無核型の ki[ru, ki[ta から予想される ⁵ki[ru]_do[gi, ⁵ki[ta]_do[gi] という形ではない⁵。無核動詞の場合は、あたかも「とき」まで含めて 1 単位であるかのように振る舞う。「とき」は前と密に接するという意味で結合度は高いが、同時に自分のアクセントを主張するように見える。試しに「人②、さま①（様）、格好③」を付けてみると、2 単位形の ki[ru]_hi[to, ki[ru_za]ma, ki[ru]_kak[ko]: と

⁵類似の現象として、香川県三豊市高瀬町方言の例がある（佐藤栄作 1986）。有核用言に実質名詞が続く場合や言い切り形の場合は有核のまま現われるが、後続語が「もん（物、者）、人、こと、とき、どこ（所）、ほう（方）、ほど（程）」などの形式名詞の場合は無核になるという。具体的には、「売る。売る家」では 2H1, 2H1+2H1【すなわち、[ウ]ル, [ウ]ル[イ]エ】で、「売るもん、売る人」では 4H0, 4H3【[ウルモン, [ウルヒ]ト】になり、他もこれに準ずるという。

田野畑方言では、無核用言に限られていて核の有無が異なる例があるわけでもなく、「とき、もの」以外の該当例も未詳で、「人」は別扱いである点がこれとは異なる。さらに詳しい調査が必要であるが、一般に用言の連体形のアクセントは、その意味を問わず自由に付けられる「とき、こと、もの」などで調べることをしてきたし、類似の方法を探る人が多いであろうが、連体形のすべてを尽くしているとは限らない点で、留意すべき事柄である。

なる（他の動詞でも同様）ので、ここでは「～とき」全体としてのアクセントを与えておく。同じことは、次に扱う形容詞の連体形+「もの」でも起こり、age:mo[no (赤いもの)となる。

形容詞では、他方言にはほとんど見られない特徴というわけではないが、過去形が(15)の形を取る。有核型は-gattaの直前のモーラに、無核型は-gattaの最初のモーラに核がくる。これらは、タラ仮定形の-カッタラでも同じで、有核形容詞であればその連用形の-クテ、-ク（ナル、ナイ）においても共通する。無核形容詞の連用形は無核で、agaku[te, aga[gu_na]ru, aga[gu_ne]:の音調を取る。なお、バ仮定形は/age:ba=, si[re:ba/で、核の有無も位置も含めて終止形にそのままバが付く。

(15) 形容詞過去形のアクセント（核表記）

[nagatta (無い), [jegattta, [jogatta (良い), [kogatta (濃い), si[rogatta (白い), mici[kagatta, mizi[kagatta (短い); aga[gatta (赤い), uNma[gatta, oNma[gatta (旨い), abuna[gatta (危ない)など（以上、第2回の調査による）。

ただし、語例を増やしたその後の調査では、3モーラ有核形容詞に/[awogatta (青い), [kurogatta (黒い), [nangagattaとna[ngagatta, [nangakute (長い), [warigattaとwa[rigatta, [warigu_[ne: (悪い) /などを記録した。中には/ci[kagatta (近い), hu[kagatta (深い), [acukkattaとac[cugatta (熱い), [osikattaとo[sigatta (惜しい), [hosikattaとho[sigatta (欲しい) /のように無声化という条件で1つの型に決まるものも確かにあるが、同一条件において2種類出て来るものもある。最後に、念のために表2の最後「白い」の例に戻って確認したところ、/[sirogatta, [sirogu_[naru, [sirogu_[ne:, [sirokute/も得られた。この広義の「ゆれ」の位置づけは今後の課題とするしかない。

9.まとめ

以上、田野畠方言のアクセントの報告を行なった。この方言のもつ古い特徴は、北奥アクセント祖体系を考える上で貴重な資料となることが明らかになったものと考える。

参照文献

- 上野善道（1989）「日本語のアクセント」杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻（上）』178–205. 東京：明治書院。
- 上野善道（1992）「昇り核について」『音声学会会報』199: 1–13.
- 上野善道（1996）「アクセント研究の展望」『音声学会会報』211: 27–34.
- 上野善道（2006）「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1–42.
- 上野善道（2017a）「青森県南部方言の名詞のアクセント資料」『国語研究』80: 1–22.
- 上野善道（2017b）「青森県津軽方言のアクセント資料」『ことばとくらし』（新潟県ことばの会）29: 71–91.
- 上野善道（2020a）「北奥方言の動詞のアクセント資料（2）」『国立国語研究所論集』18: 35–75.
- 上野善道（2020b）「北奥方言における昇り核の由来」『国語研究』83: 1–26.
- 大野眞男・大橋純一・小島聰子・竹田晃子・牧原登（2016）『岩手県田野畠村大芦方言の非ズーズー弁の音声』（平成27年度文化庁被災地における方言の活性化支援事業「おらほ弁で語っぺし展開編」被災地の言語文化資料），岩手大学教育学部日本語学研究室。
- 佐藤栄作（1986）「香川県高瀬アクセント所属語彙（用言篇I）」『神戸山手女子短期大学紀要』29: 135–160.
- 佐藤喜代治（1966）「岩手県三陸地方北部の言語調査報告」『日本文化研究所研究報告』別巻第4集（東北文

- 化研究室紀要通巻第8集), 11–56. (アクセントの項の執筆は佐藤亮一)
 平山輝男 (1957)『日本語音調の研究』東京:明治書院.
 牧原登 (2014)『岩手県下閉伊郡田野畠村 大芦のことばとその周辺』私家版.
 森下喜一 (1982)「岩手方言アクセントの特徴と分布について—名詞を中心に—」『国語研究』45: 14–39.
 森下喜一 (編) (1986)『岩手方言アクセント辞典』東京:第一書房.

【補】田野畠村方言の動詞のアクセントについては、次の統編を参照されたい。
 上野善道 (印刷中)「岩手県田野畠村方言の用言アクセント資料(1)」「ことばとくらし」32.
 上野善道 (印刷中)「岩手県田野畠村方言の用言アクセント資料(2)」「国語研究」84.

Accent Data from the Tanohata Dialect, Iwate Prefecture: The Proto-Accent System of Northern Tohoku Dialects

UWANO Zendo

Emeritus Professor, The University of Tokyo/
 Project Collaborator, NINJAL

Abstract

This paper presents and examines the accent data of nouns and conjugated forms in the Tanohata dialect, Iwate Prefecture. The dialect has archaic features in the six- and seven-word-class accents of three-mora nouns, as well as in some conjugated forms of verbs and adjectives. The accent system of this dialect is in accordance with the hypothesis of the proto-system of the Northern Tohoku dialects that the author had previously proposed. However, some minor revisions of the hypothesis are required. The Tanohata dialect significantly contributes to the reconstruction of the proto-system.

Keywords: Tanohata dialect, accent, archaic forms, proto-accent system of Northern Tohoku dialects, reconstruction

表1 田野畠村体言アクセント資料

類	見出し	田野畠	類	見出し	田野畠
11	柄	0(je), jezaru 0(柄付き笊), jecuka 0(柄の頭の方)	1z	蛾 (が) ⁱ	0,<o>kakkabe 1(古く蝶々も)
11	蚊	0	1z	氣 (が狂う)	0
11	子	0	1z	九 (く)	1
11	血	0(ci)	1z	苦 (にする)	1
11	戸	0,tohaNdo 2(戸半戸 . 戸と小さい半戸 1 の総称)	1z	五	1
11	帆	0 (OK)	1z	碁 (ご)	1
12	鵜 (う)	<m>1(海にはいたが縁遠い . 地名に unosu 2 あり)	1z	詩	0(si)
12	名	0	1z	四 (し)	1,joN 1
12	葉	0(happa 0 とも)	1z	痔 (が痛い)	0(zī)
12	日 (が出た ; が良い ; その日は)	0;0;0	1z	地 (が出る)	0(zī)
12	藻 (も)	0,1.(揺れる)	1z	字	1(zī)
12	矢	0	1z	茶 (色 : お茶)	0(cja);0(ozja, ozjako)
13	絵	1(je)	1z	出 (が悪い)	1 (OK)
13	木	1	1z	二	1
13	酢	1(su)	1z	分 (が良い)	0(bu)
13	田	1	1z	間 (が抜ける)	0
13	手	1, teppe 1(手の卑語 , 烏賊や蛸の手足)	1z	実	0
13	根	1	1z	身 (に付ける)	0
13	火	1	21	飴	0(ameko)
13	屁 (～)	1	21	烏賊 (いか)	0(iga), surume 0 とも (生でも)
13	穂	1	21	牛	0(usi), <o>bego 0, agabego 0(赤牛 = 荷牛)
13	目	1,<普>managu 2	21	梅	0(ume,<o>Nme)
13	湯(と水:風呂)	1,<m>oju 1(丁寧); 1,jukko 3	21	枝	0(eda,<o>jeda)
13	夜 (が明ける)	1(jo)	21	海老 (えび)	0(ebi,<o>jebi)
13	輪	1	21	柿	0(kagi)
1x	毛	0(柔い毛 , 隱毛 , 腋毛は kepuka 0, 卑猥感)	21	風	0(kaze)
1x	巣	1(su)	21	蟹 (かに)	0(gani)
1x	背 (が高い)	1	21	金 (かね) (金属 ; 錢)	0;zen 1, zjeNko 3
1x	歯	1(歯茎は hango 2)	21	壁	0(kabe)
1x	刃	1	21	雉 (きじ)	0(kizi)
1z	胃	0	21	傷	0(kizu)
			21	桐	4(kiNnogi, <m>kirinogi)
			21	釘	0(kungi)
			21	口	0(kuzi)

類	見出し	田野畠	類	見出し	田野畠
21	首	0(kubi, kupita:)	21	百合 (ゆり)	0(juri), <o>joro 0(「喜び」に掛けて結婚式に百合の根を出した)
21	腰	0. kosijami 0(腰痛).	21	横	0(jogo), jogoka: 0(横側)
21	胡麻 (ごま)	0	21	嫁	0(jome(ko)). jomedori 0, jomejari 0(嫁取り, 嫁やり).
21	これ	0	22	癌 (あざ)	0(aza. ホクロの意)
21	酒	0(sage)	22	鰯 (あじ)	1(azi)
21	皿	0	22	あれ	0
21	皺 (しわ)	2(OK)	22	栗毬 (いが)	0(kacca, 雲丹の殻も). 区別は kurikacca 3 と kazeno_kacca 1+0.
21	杉	0(sungi), sunginogi 4	22	石	0(isi)
21	底	0(sogo)	22	岩	0(juwa). juwagaNkura 0 (崖). Cf. 地名に <o>juwade 2 (岩手), juwaizumi 0 (岩泉), hamajuwaizumi 4(浜岩泉) あり.
21	袖	0(sode)	22	歌	0(uda)
21	滝	0(tagi)	22	音	0(odo)
21	竹	0(tage)	22	垣 (かき)	0(kagi, kagine)
21	棚	0	22	型	0(kada)
21	誰	1, daremo 0	22	紙	0
21	爪	0	22	殻 (から)	2(ke:ko 少し大きめの貝殻), 1(kai 生の貝, 海にいる貝)
21	どこ	1(dogo) (OK)	22	川	0(ka:)
21	鳥	0	22	北	0(kita)
21	西	0(nisi)	22	牙 (きば)	0(kipa) (OK)
21	蠅	0(hai, he:). abu 1 は別.	22	杭 (くい)	0(kui), bokkui 0 (棒杵). 脆くなった木の切り株や歯根は kakkui 0.
21	箱	0(hago)	22	串	0(2 にも揺れる .kusi). kusijagidaNci 5(串焼き団子).
21	蜂	0(bazi 総称), agabazi 0(赤蜂), mizubazi 1(蜜蜂)	22	鞍 (くら)	2
21	鼻	0	22	下 (しも)	0. 反対は kasa 2 (上).
21	羽根	0	22	蟬 (せみ)	0
21	鬚	0(hinge)	22	旅	0(tabu)
21	暇	0	22	為 (になる)	0
21	笛	0	22	次	2(cungi)
21	蓋	0(huta). 「札」も同音.	22	弦 (弓のつる)	0(curu. 鍋のも), geN 1
21	筆	0(hute, hude)	22	梨	0(nasi)
21	星	0(hosi)			
21	真似 (まね)	0			
21	右 (と左; の通り)	0(mingi), mingika: 0(右側);x			
21	水	0(mizu)			
21	道	0(mizi), ke:do: 4(街道)			
21	虫	0(musi)			
21	桃	0			

類	見出し	田野畠	類	見出し	田野畠
22	夏	0(nazu)	23	鍵	2(kangi)
22	虹	0(nizi のみ)	23	髪	2
22	橋	0(hasi)	23	瓶 (かめ)	2
22	旗	0(hada)	23	皮 [革]	ともに 2(ka:) (OK)
22	機 (はた)	0(hada). hadaori 0, <o>hadangosogu 4(機織り機).	23	茎	2(kugi)
22	肘 (ひじ)	0(hizi, <m>hizu)	23	草	2
22	人 (が来た ; あの～が)	0;2	23	櫛 (くし)	2(kusi, <m>kusu)
22	昼	0. 昼食は hiri:(昼飯) 3.	23	靴	1(kuzu) (OK)
22	冬	0(huju)	23	熊	2
22	町	0(mazi)	23	雲	2
22	胸	0	23	栗 (くり)	2
22	村	0 (OK)	23	米	2
22	雪	0(jugi)	23	坂	2(saga)
22	余所 (よそ)	<m>2(hoga 1)	23	塩	2(sio), <o>2(sijo), 1(sjo). 古く製塩で海水を煮詰める薪は <o>sjogi 2(塩木), それを切る仕事は <o>sjogiri 4.
22	技 [業]	2(waza)	23	島	2(sima)
23	堀 (あか)	2(aga)	23	墨	2(sumi)
23	足	2(asi)	23	谷	0 (OK)
23	穴	2	23	玉 [球]	2
23	網 (あみ)	2(tamo 0 とも)	23	月	2(cugi)
23	池	2(ige)	23	土	2(cuzu, <m>cuзи)
23	犬	2(inu), <o>iN 2, iNko 3	23	綱	<m>2(cuna), na: 2(< 縄)
23	芋	2(元はジャガ芋 , 山芋 2 を まとめて hodo, hodoimo 0. zjngaimo 2 は戦後)	23	角 (つの)	2
23	色	2(iro), irope: 4	23	毒	2(dogu) (OK)
23	腕	2(ke:na 2)	23	年 [歳]	2(tosi)
23	馬	2(uma, <o>oma, Nma)	23	波	2
23	膾 (うみ)	2	23	蚤 (のみ)	2
23	裏	2, uraka: 4(裏側)	23	海苔 (のり)	2
23	鬼	2. 鬼ごっこは oniko 1. 親が 子供の髪に使った怖いものは aNmo:ko 3, aNmozi:ko 4, aNmo:4 など家によつてもさ まざま .	23	恥	2(hazi, <m>hazu)
23	親	2	23	鉢	2(hazi)
23	貝	1(kai 生貝), 少しきめの貝 や貝殻は ke:ko 2	23	花	2
			23	腹	2
			23	孫	1(mango) (OK)
			23	豆	2
			23	店	2

類	見出し	田野畠	類	見出し	田野畠
23	耳	2	24	汁	1(ciru), hanaciru 0(鼻汁), nappaziru 4(菜つ葉汁). cu:ko 3 は ozuge 0(味噌汁) の汁のみを言う .
23	姪 (めい)	2(me:) (OK)	24	筋 (すじ)	1(suzu, <m>suzi. 体の). suzugo 3(筋子).
23	山	2	24	隅	1(suma), sumako 3. 人目を避ける猫は sumanego 1.
23	指	2(jubi)	24	銭 (ぜに)	1(zene), zeneko, zjeNko 3
23	夢	2(jume)	24	外 (そと)	2(sodo) (OK)
23	綿 (わた)	2(wada)	24	側 (そば)	1(soba)
23	鰐 (わに)	0 (OK)	24	空 (そら)	1
24	跡 [後]	1(ado)	24	種	1
24	息	1(igi)	24	杖 (つえ)	2(cue, <o>cuje). 特に方言なし .
24	板	1(ida)	24	粒	1(cubu)
24	いつ(が良い ? ; ~来る ?)	1;1. (izu)	24	苗	1(ne:)
24	糸	1(ido)	24	中	1(naga)
24	稻	1(ine)	24	何(が; も無い)	1;1,0(<普>naNnimo 3)
24	臼 (うす)	1(usu)	24	鑿 (のみ)	1
24	海	1	24	箸	1(hasi)
24	帯	1(obи)	24	肌	1(hada). jappada 0(火傷).
24	傘 [笠]	1 [1]	24	針	1
24	数	1(kazu). 数えるは kaNze:ru 4.	24	舟	1
24	肩	1(kada)	24	紅 (べに)	1
24	角 (かど)	1(kado)	24	籠 (へら)	1
24	鎌	1	24	他 (ほか)	1(hoga) (OK)
24	杵 (きね)	1(kingi)	24	松	1(mazu)
24	今日 (は; ~ 来る)	1;1	24	味噌	1
24	錐 (きり)	1	24	蓑 (みの)	1
24	屑 (くず)	<m>1, gomi 2, goNdo: 4 (外の 大きな). Cf. 零石 goNdomozu 4.	24	麦	1(mungi)
24	管 (くだ)	2(kuta), kutako 3 (OK)	24	宿	1(jado)
24	今朝 (けさ)	1(副詞も 1)	24	罠 (わな)	1
24	桁 (位; 家の)	2,1. (keda). 二階や屋根に上 がる危ない行為を kedaangari 3.	24	藁 (わら)	1
24	下駄 (げた)	1(geda) (OK)	25	藍 (あい)	0
24	鞘 (さや) [莢 (豆の)]	1 [1]	25	青 (色; 馬)	1;x(いない)
			25	赤 (色; 犬)	1(aga);x(<o>agaiN 0)
			25	秋	1(agi)

類	見出し	田野畠	類	見出し	田野畠
25	朝 (と晩)	1(副詞も 1)	2x	上 (～に；そ の～に)	0;0
25	汗	1	2x	内(～と外, 家; その～に)	0;0
25	兄	1(<o>aina), aniki 2	2x	沖	2(ogi) (OK)
25	虻 (あぶ)	1(abu)	2x	奥	2(o:gu), 1(ogu)
25	雨	1	2x	亀	2
25	鮎 (あゆ)	<m>1 (なし)	2x	鴨 (かも)	<m>1(来ない)
25	井戸	1(ido.「糸」と同音). idohori 2.	2x	ここ	0(kogo) (OK)
25	桶	1(oge)	2x	下 (～に；そ の～に)	0;0
25	牡蠣 (かき)	x(食べなかった)	2x	そこ	0(sogo) (OK)
25	蔭 [影]	1[1]. (kange)	2x	蛸 (たこ)	2(tago)
25	蜘蛛 (くも)	2(kupo) (OK). jegagi 1(蜘蛛 の巣).	2x	鳩	2(hado)
25	黒 (色；犬)	1;x	2x	本 (もと)	2(modo)
25	鯉	1	2x	夜 (と昼；～ 来る)	1;1
25	声	1	2z	顎 (あご)	0(angita:), 1(ango)
25	琴	<m>1(kodo) (なし)	2z	味	0(azi)
25	鮭	1(sage)	2z	仇 (を討つ)	0(ada)
25	猿	1	2z	粗 (を探す)	0
25	白 (色；犬)	1;x	2z	以後	<m>1(ingo), koregara 0
25	縦	1(tade)	2z	椅子 (いす)	1
25	足袋 (たび)	1(tabi)	2z	一	2(号令などでは 1)
25	常 (～に)	<m>1, <普>iccumo 3	2z	疣 (いぼ)	1(ibo)
25	露	2(cuju のみ) (OK)	2z	嘘	2 (OK)
25	鶴	1(curu)	2z	うど (の大木)	1(udo)
25	鍋	1(nabe)	2z	運	1
25	鰐 (はも)	<m>1 (なし)	2z	過去	<m>1, <普>mugasi 0, me: 1
25	春	1	2z	舵 (かじ)	1(kazi)
25	蛭 (ひる)	<m>1 (いない)	2z	火事	1(kazi)
25	鮒 (ふな)	1	2z	空 (から)	0
25	蛇	1(hebi)	2z	勘 (がいい)	0
25	前(と後;以前)	1(me:)	2z	缶	1, gaNgarakaN 5
25	窓	1(mado)	2z	きざ (～だ)	<m>1(kiza)
25	蘭 (まゆ)	1	2z	規模	1(kibo)
25	婿 (むこ)	1(mugo), mugoko 3, mugokko 4	2z	九 (きゅう)	1
25	腿 (もも)	1	2z	金(と銀;将棋)	1
2x	今(～は;～に)	1;1 (副詞も 1)			

類	見出し	田野畠	類	見出し	田野畠
2z	癖	0	2z	天	1
2z	瘤 (こぶ)	0(kobu)	2z	土砂	1
2z	独楽 (こま)	0,<o>zūNnguri 3	2z	土手	2(dode) (OK)
2z	柵 (さく)	2(sagu)	2z	溝 (どぶ)	2(dobu) (OK)
2z	さぞ (...だろ う)	<m>1(sazo)	2z	どれ (が良い ?)	1. doremo は 0.
2z	三	1	2z	なお (猶; 尚)	<m>1
2z	鹿	2(sika), <o>sisi 2(鹿, 猪, 犬 羊の総称), aozisi 2(羚羊), sisiodori 1(鹿踊り)	2z	謎	1(nazo) (OK)
2z	事故	1(ziko)	2z	生 (なま) (~ で食う; ビー ル)	1(生魚は <o>bueN(ko) 0); <n>1
2z	紫蘇 (しそ)	0(suso), susonoha 0(葉)	2z	奈良 (地; 時代)	1
2z	七 [ナナ]	2(sizi) [1]	2z	肉	2(nigu)
2z	縞 (しま)	1(sima) (OK)	2z	葦 (にら)	2 (OK)
2z	車庫	1(sjako)	2z	二羽	1
2z	軍鶴 (しゃも)	<m>1	2z	沼	2
2z	十 [トオ]	1(zju:) [2] (OK)	2z	葱 (ねぎ)	1(nengi)
2z	図画	1(zunga)	2z	猫	1(nego)
2z	砂	0(suna)	2z	熱	2(nezu)
2z	スリ	<m>2	2z	喉 (のど)	1(nodo)
2z	席	1(segi)	2z	糊	2
2z	咳 (せき)	2(segi)	2z	馬鹿	1(baga)
2z	千	1	2z	禿げ (頭の)	1(hange)
2z	象 (動)	0	2z	馬車	1
2z	蕎麦 (そば)	1(soba)	2z	八	2(hazi)
2z	夙 (たご)	2(tago) (OK)	2z	罰 (が当たる)	2(bazi)
2z	只 (~で)	1(tada)	2z	晩	0(baN, baNnge:)
2z	ダニ	0 (OK)	2z	番	1(順番, 番をする)
2z	束 (たば)	1(tabu)	2z	パン	1
2z	鮈 (たら)	1	2z	襞 (ひだ)	2(hitā) (OK), hitako 3
2z	樽	2 (OK)	2z	雛 (ひな)	1
2z	段	1, kaidaN 0	2z	百 (と千; ~ ある)	2;0. (hjagu)
2z	知恵	2(cie)	2z	平 (ひら) (社 員)	1
2z	蔓 (つる) (植)	0(curu)	2z	びら (をまく)	0
2z	鉄	1(tezu) (OK)	2z	枇杷 (びわ)	<m>2 (ない)
2z	出目	x	2z	瓶 (びん)	1
2z	寺 [お~]	0 [0(odera)]			

類	見出し	田野畠	類	見出し	田野畠
2z	服	1(hugu) (OK)	2z	湯気	2(junge) (OK)
2z	豚	1(buda) (OK)	2z	酔い (が回る)	2(joi) (OK)
2z	撫 (ぶな)	<m>1 (ない? 楢は nara 1)	2z	用 (がある)	2(jo:) (OK). jo:tasi 4(用足し).
2z	鰯 (ぶり)	1(小さいのは sjokko 3)	2z	理科	1(rika)
2z	風呂	2	2z	蝶 (ろう)	2(ro:) (OK)
2z	堀 (へい)	2(he:) (OK)	2z	六	2(rogu)
2z	変 (~に)	1(heNtani, heNtekoni も 1), ogasigu 3(おかげしく)	2z	驢馬 (ろば)	<m>1(roba) (本で)
2z	棒	0	2z	和歌	1(waka)
2z	骨	2	31	田舎 (いなか)	0(inaga)
2z	ほぼ (~完成)	1(hobo)	31	鰯 (いわし)	0(juwasi, <m>juwasu)
2z	ぼや (を出す)	<m>1 (あまりない)	31	嗽 (うがい)	0(unge:)
2z	捕虜	1	31	漆 (うるし)	0(urusi)
2z	ぼろ (衣:が 出る)	1	31	踊り	0(odori)
2z	本 (ほん)	1	31	飾り	3(kazari) (OK)
2z	盆 (行事 [お ~]; 容物 [お ~])	1 [2];0 [0 (丁寧)]	31	形	0(kadazi)
2z	鱈 (ます)	0	31	鰐 (かつお)	0(kazuo のみ)
2z	まだ (~だ)	1(mada)	31	着物	3(<o>kimoN) (OK). 幼児語 popo 1.
2z	万 (数)	1	31	鎖	3 (OK)
2z	溝 (みぞ)	0(mizo)	31	車	0
2z	蜜	1(micu), bazinoame(ko) 0, <o>bazino_sjoNbeN 0+3	31	煙	0(kebu)
2z	無茶 (~だ)	<m>1(mucja), mudecu 0, mudeppo: 0	31	氷	0,<普>singa 2
2z	もし (...なら)	1	31	今年 (ことし)	0(kodosi) (副詞も 0)
2z	百舌 (もず)	1(mozu)	31	子供	0(kodomo), warasi 3
2z	餅	0(mozi(:), <m>mozu(:))	31	魚	0(sagana)
2z	門 (もん)	1, <o>zjo:nguzi(牛が入らないようにした柵). moNngame: 3(門構え).	31	桜	0(sagura)
2z	山羊 (やぎ)	1(jangi)	31	障子 (しょう じ)	3(sjo:zi) (OK)
2z	自棄(やけ)(~ に)	x	31	印	0(sirusi(ko))
2z	痩せ (の大食 い; が目立つ)	1;1	31	相撲 (すもう)	3(sumo:) (OK)
2z	屋根	1	31	畠	0(tadami)
2z	やや (~良々)	1	31	序 (ついで) (に)	0(cuide)
			31	机	0(cugue)
			31	隣	0. ただし tonarikiNzjo 2.
			31	名前	0(name:)
			31	寝言	0(nengodo, nengozome)

類	見出し	田野畠	類	見出し	田野畠
31	初め	0(hazime. hasime の人も)	34	言葉	3(kodoba)
31	鼻血	0(hanazi, <m>hanazu)	34	暦	3(kojomi)
31	羊	0(hizuzu) (OK)	34	境	1(sage:) (OK). sage:osi 3 境押し (利己主義者).
31	二日 (ふつか) (に ; ～待つ)	0;0. (hucu ^o ka, <o>huzuga)	34	白髪 (しらが)	3(siranga)
31	埃 (ほこり)	0(hogori), bosu 1	34	硯 (すずり)	3(suzuri)
31	味方	0(migada). 「見方」は 3.	34	宝	3(tagara)
31	三日 (みっか)	0(副詞も 0)	34	助け (を呼ぶ)	3(tasuke)
31	港	0(minado)	34	谷間	0 (OK)
31	昔 (と今 ; ～ 見た)	0;0. (mugasi, <m>mugasu). mugasipanasi 0 (昔話)(OK).	34	頼み (がある)	3
31	息子 (むすこ)	0(musuko)	34	俵	3(ta:ra)
31	柳	0(janangi)	34	包み (を開く)	3(cuzumi)
31	涎 (よだれ)	0(jodare), bero 1 (OK)	34	鰐 (なます)	3(namazu)
32	小豆 (あづき)	0(aNzugi, azugi)	34	匂い	<m>3(nioi), kamori 0(OK)
32	女	0(onango)	34	縫い目	3
32	毛抜き	0(kenugi)	34	鋏	3
32	東	3(hingasi) (OK)	34	林	3(hajasi)
32	二重 (ふたえ)	3(hutae) (OK)	34	光	3(hikari)
32	二つ (～で)	4(hutaccu) (副詞は 0)	34	袋	3(huguro)
32	二人 (～で)	4(huta:ri), 3(hutari) (副詞 0)	34	襖 (ふすま)	3(husuma)
32	三つ (～で)	3(miccu) (副詞 0)	34	席 (むしろ)	3(musiro)
32	娘	0. 若い女性は aneko 2.	35	朝日	2
32	夕べ [昨晚]	1(juNbe), <n>1(ju:be) (副詞 も 1)	35	油	2(abura) (OK)
33	小麦	0(komungi)	35	鮑 (あわび)	0(awabi) (OK)
33	力	3 (OK)	35	哀れ	1 (OK)
34	あした (～は; ～来る)	2(asitta), <n>asita 3 (後者副 詞 0). 「足駄」も asita 3.	35	五つ (～に)	2(izuzu) (副詞も 2)
34	頭	3(adama)	35	従兄弟 (いと こ)	1(idogo) (OK). 0 は床の意 .
34	团扇 (うちわ)	3(uziwa)	35	命	2(inozi)
34	男	3(odogo)	35	親子	2(ojago)
34	表 (おもて)	3(omode)	35	神楽 (かぐら)	2(kangura) (OK)
34	鏡	3(kangami)	35	鰈 (かれい)	2
34	敵 (かたき)	3(kadagi)	35	胡瓜 (きゅう り)	x (uri 1)
34	刀	3(kadana)	35	心	2(kogoro)
34	鉋 (かんな)	3(kaNna)	35	柘榴 (ざくろ)	<m>1(zaguro) (なし)
34	きのう (～は)	4(kiNno:), 3(kino:) (副詞 0)	35	姿	2(sungada)

類	見出し	田野畠	類	見出し	田野畠
35	簾 (すだれ)	3(sudare) (OK)	36	左	1(hiNdari)
35	櫛 (たすき)	3(tasugi) (OK)	36	雲雀 (ひばり)	<m>2(hibari) (いるか不明)
35	情け	3(nasage)	36	広さ	0
35	涙	<m>1(namida), meccuru 3(目汁). Cf. hanaciru 0(鼻汁 . -curu もか).	36	誠 (を ; に ; 人名)	x;<m>2;<m>2
35	柱	3(has(i)ra)	36	蚯蚓 (みみず)	1(memezu)
35	单衣 (ひとえ)	2(hitoe), hitoemoN 3(- 物)	36	蓬 (よもぎ)	1(jumungi). jumungimozi 4(蓬餅).
35	火箸	2(sipasi) (OK)	37	苺 (いちご)	1(icingo)
35	簪 (ほうき)	2(ha:gi) (OK)	37	後ろ	1(usiro. usso 1 の人も)
35	枕	2(magura) (OK)	37	蚕 (かいこ)	1(kaigo), <o>to:dogo 4
35	紅葉 (もみじ)	2,(1 もか)(momizi)	37	兜	1(kabudo)
35	山葵 (わさび)	<n>1(wasabi). 昔は酢で .	37	辛子 (からし)	1(karasi). 唐辛子は naNbaN 3.
36	菖蒲 (あやめ)	<m>2. <普>umabanako 4. sjo:bu 1 は別種 .	37	鯨	1(kuzira)
36	兎	1(usangi)	37	薺	1(OK)
36	鰻	1(unangi)	37	卵	1(tamango)
36	大人 (おとな)	1(odona, <o>ozuna)	37	便り	0, tajoriko 0. (OK)
36	蛙	1,<普>bikki 0, huruda 1 (蝦蟇 蛙)	37	盥 (たらい)	1(tare:)
36	鷗 (かもめ)	1(<o>kangome)	37	千鳥	x(縁なし)
36	狐	1(kizune)	37	椿	<m>1(cubaki). cubakiabura 5 は商品にあったが .
36	虱 (しらみ)	2 (OK)	37	鉛	1. 「訛り」は 3.
36	芒 (すすき)	<n>1(susugi), <普>kaja 1	37	畑	1(hadage). 畑仕事は hadagekasengi 4(畑稼ぎ).
36	雀	1(suzume)	37	一つ (～で ; も)	2(hitozu)
36	李 (すもも)	1(仲間に bodaNkjo: 2)	37	一人 (～で ; も)	2(hitori)
36	背中	1(senaga)	37	緑 (色 ; 名前)	<m>2(midori, midoriyo 5); 2
36	高さ	1(tagasa)	37	病い	1(jaNme:) (OK)
36	団子 (だんご)	1(daNngo. 丸くて小さい). 団子を平らに延ばしたのは daNci 1, 丸めて中央を親指と人差指で圧したのは daNsu 0.	3x	間	3(aida), aidako 4, <普> awe: 3, awe:ko 2. (OK)
36	田圃 (たんぼ)	1	3x	欠伸 (あくび)	3(agubi) (OK)
36	燕 (つばめ)	1(cubame)	3x	嵐	3(arasi) (OK)
36	長さ	1	3x	柏	kasiranogi 5, kasiragi 4. (柏木)
36	鼠	1(nezumi)	3x	烏 (からす)	1(karasu)
36	裸	1(hadaga)	3x	榮螺 (さざえ)	<m>2 (なし)
36	裸足 (はだし)	1(haNda:si) (OK)	3x	狸	1(tanugi), kuse: 1(臭いことか). 地名に kuse:wadari 4(狸渡り) あり .
			3x	翼	<m>0, <普>hane 0

類	見出し	田野畠	類	見出し	田野畠
3x	釣瓶 (つるべ)	0(curube)	3z	蜜柑 (みかん)	2(migaN)
3x	蜥蜴 (とかいげ)	<n>0(tokange), kanahebi 0	3z	岬	3(misagi)
3x	仲間	0(nagaba)	3z	皆(で;~出る)	3;0
3x	斜め	2	3z	百足 (むかで)	0(mugade, <o>mugaze)
3x	二十歳 (はたち)	1(hadazi)	3z	林檎 (りんご)	3(riNngo), 4(riNgo:) (OK)
3x	麓 (ふもと)	3(humodo)	3z	若布 (わかめ)	2(wagame)
3x	螢	1(hodaru, <n>hotaru)	4z	合い鍵	0(aikangi)
3x	御輿 (みこし)	0(migosi)	4z	朝顔	2(asangao)
3x	南	3 (屋号は 2)	4z	足音	4(asiodo)
3x	向 (むこ) う	0(mugo:)	4z	甘酒	<m>0(amazage), <普>oge:ko 0(<お粥っこ)
3x	盲	3(megura), zado: 3, mekko: 4 (前者全盲, 後者は片盲か)	4z	編み物	4(amimoN)
3x	草鞋 (わらじ)	3(,2 もか)(warazi)	4z	雨降り	4
3x	蕨 (わらび)	3(warabi)	4z	稻扱き	2(inekogi)
3z	通草 (あけび)	3(agebi) (OK)	4z	猪 (いのしし)	4(inosisi)
3z	靫 (えくぼ)	1(egubo)	4z	鶯 (うぐいす)	2(unquisu)
3z	榎 (木; 茸)	<m>2(enogi) (なし). orinugi 0 は楓茸 .	4z	渦巻き	4(uzumagi) (OK)
3z	垣根	0(kagine)	4z	梅干し	0(umebosi), <普>umezuge 0
3z	瓦	2(ka:ra) (OK)	4z	弟	4(odo:do, odo:to)
3z	楔 (くさび)	0	4z	音楽	1(oNngagu)
3z	毛虫	0(kemusui), ge:daga 4	4z	金持ち	0(kanemozi, kanemozu)
3z	獣 (けもの)	3(kemoN), 4(kedamoN)	4z	蝙蝠 (かまきり)	4(kamakiri). 方言形なし .
3z	黄金 (こがね)	<m>0(kongane)	4z	剃刀 (かみそり)	4(kamisuri) (OK)
3z	梢(こずえ) (木の; 人名)	x(kinoura 4 木の末); <m>2	4z	雷	4(kaNdazi)
3z	木靈 (こだま)	x(jamabiko, jamapiko 1)	4z	唐傘 (からかさ)	3(karagasa)
3z	牛蒡 (ごぼう)	1(goNbo:) (OK)	4z	ガラス戸	4(garasuto) (OK)
3z	小道	0(komizi)	4z	記念日	2
3z	蠍 (さそり)	<m>0(いない. 縁なし)	4z	兄弟	1(kjo:de:)
3z	簀子 (すのこ)	2(sunogo)	4z	薬屋	1 (OK)
3z	そば屋	2(sobaja)	4z	口笛	0(kuzibue), <o>hosobe 1
3z	扉	<m>0(tobira), <普>to 0	4z	黒んぼ	2(kuroNbo(:))
3z	ノッポ (背高)	1, se:daganoppo 5	4z	蝙蝠 (動; 傘)	1(ko:mori. 傘は後から)
3z	帽子	1(sjappo:). Cf. 雪石は sjappu 1.	4z	コスモス	1
3z	睫毛 (まつげ)	1(mazunge)	4z	小麦粉	0(komungiko)
3z	マッチ	1(macci), <o>adekosuri 0	4z	こんにゃく	4(koNnjagu)

類	見出し	田野畠	類	見出し	田野畠
4z	坂道	3(sagamizi)	4z	人参（にんじん）	4(niNziN, <o>neNziN)
4z	座蒲団	2(zabudoN). zahutoN 3 の人も。	4z	鋸（のこぎり）	1(nogo)
4z	三月	1(saNgazu) (OK)	4z	蛤（はまぐり）	<n>2(hamanguri) (子供の頃なかった)
4z	椎茸	1(si:dage). 天然物あった。	4z	歯磨き	2(hamingagi)
4z	正月	4(sjo:ngazu)	4z	針金	3(haringane)
4z	スリッパ	2	4z	引越し	0(hikkosi, hikkosu)
4z	先生	3(seNse:)	4z	梟（ふくろう）	3(huguro:), ohho: 1(鳴き声から)
4z	洗濯	4(seNtagu) (OK) Cf. seNdagu 4 は衣類の意。	4z	風呂敷	2(hurusigi)
4z	大根	2(de:go)	4z	松茸	1(mazudage)
4z	玉葱（たまねぎ）	3(tamanengi)	4z	右側	0(mingina:)
4z	手拭い	2(tenungui)	4z	蜜蜂	1(mizubazi, mizubazu)
4z	手袋	2(tebuguro)	4z	紫	2(murasagi)
4z	友達	0(tomodazi, tomodaciko)	4z	餅搗き（-つき）	0(mozi(:cugi) (OK)
4z	土曜日	2	4z	物置き	4(monoogi)
4z	縄跳び	2(nawatobi) (OK)	4z	来月	1(re:ngezu, raingezu)
4z	鶏	0(niwatori) (OK). 幼児語 kokko 1.	4z	蠟燭（ろうそく）	4(ro:sogu)

表2 田野畠用言活用形アクセント資料

類	項目	田野畠	類	項目	田野畠
2a1	着る	0(kiru)	2a1	寝るな	2(neruna, neNna)
	着る時	4(kirudogi, kittogi)		寝ない	0(nene:)
	着た	0(kita)		寝れば	0(nereba)
	着た時	4(kitadogi)		寝ろ	0(nero)
	着て	0(kite)		居（い）る	0(iri), 「おる」も言えば 1
	着るな	2(kiruna, kiNna)		居る時	4(irudogi, ittogi)
	着ない	0(kine:)		居た	0(ida)
	着れば	0(kireba)		居た時	4(idadogi)
	着ろ	0(kiro)		居て	0(ide)
	寝る	0(neru)		居るな	2(iruna, iNna)
2a1	寝る時	4(nerudogi, nettogi)		居ない	0(ine:)
	寝た	0(neda)		居れば	0(ireba)
	寝た時	4(nedadogi)		居ろ	0(iro)
	寝て	0(nede)	2c1	する	0(suru), <x>su, jaru 0

類	項目	田野畠	類	項目	田野畠
2a2	する時	4(surudogi, suttogi), jattogi 0	2b1	行って	0(itte, <o>jutte)
	した	0(sita)		行くな	2(iguna)
	した時	4(sitadogi)		行かない	0(igane:)
	して	0(site)		行けば	0(igeba, <o>jugeba)
	するな	2(suruna, suNna)		行け	0(ige)
	しない	0(sine:)		売る	0(uru)
	すれば	0(sureba)		売る時	4(urudogi, uttogi)
	しろ	0(siro, se)		売った	0(utta)
	出る	1(deru), deharu 2		売った時	5(uttadogi)
	出る時	1+2(deru_dogi, det_togi)		売って	0(utte)
	出た	1(deda)		売るな	2(uruna, uNna)
	出た時	1+2(deda_dogi)		売らない	0(urane:)
	出て	1(dede)		売れば	0(ureba)
	出るな	1(deruna, deNna)		売れ	0(ure)
	出ない	1(dene:)	2b1	買う	0(ka:)
	出れば	1(dereba)		買う時	4(ka:dogi)
	出ろ	1(dero)		買った	0(katta)
	見る	1(miru)		買った時	5(kattadogi)
	見る時	1+2(miru_dogi, mit_togi)		買って	0(katte)
	見た	1(mida)		買うな	2(ka:na, kauna)
	見た時	1+2(mida_dogi)		買わない	0(ka:ne:)
	見て	1(mide)		買えば	0(ka:ba, kaeba)
	見るな	1(miruna, miNna)		買え	0(kae)
2d2	見ない	1(mine:)		置く	0(ogu)
	見れば	1(mireba)		置く時	4(ogudogi)
	見ろ	1(miro)		置いた	0(oida)
	来る	1(kuru)		置いた時	5(oidadogi)
	来る時	1+2(kuru_dogi, kut_togi)		置いて	0(oide)
	来た	2(kita)		置くな	2(oguna)
	来た時	2+2(kita_dogi)		置かない	0(ogane:)
	来て	2(kite)		置けば	0(ogebe)
	来るな	1(kuruna, kuNna)		置け	0(oge)
	来ない	1(kone:)	2b1	押す	0(osu)
2b1	来れば	1(kureba)		押す時	4(osudogi, osutogi)
	来い	1(ko:)		押した	0(osita)
	行く	0(igu, <o>jugu)		押した時	5(ositadogi)
	行く時	4(igudogi, ittogi)		押して	0(osite)
	行った	0(itta, <o>jutte)		押すな	2(osuna)
	行った時	5(ittadogi)		押さない	0(osane:)

類	項目	田野畠	類	項目	田野畠
2b1	押せば	0(oseba)	2b2	取る	1(toru)
	押せ	0(ose)		取る時	1+2(toru_dogi, tot_togi)
	飛ぶ	0(tobu)		取った	1(totta)
	飛ぶ時	4(tobudogi)		取った時	1+2(totta_dogi)
	飛んだ	0(toNda)		取って	1(totte)
	飛んだ時	5(toNdadogi)		取るな	1(toruna, toNna)
	飛んで	0(toNde)		取らない	2(torane:), 1(toNne:)
	飛ぶな	2(tobuna)		取れば	1(toreba)
	飛ばない	0(tobane:)		取れ	1(tore)
	飛べば	0(tobeba)		読む	1(jomu)
2b2	飛べ	0(tobe)		読む時	1+2(jomu_dogi)
	会う	1(a:) (OK)		読んだ	1(joNda)
	会う時	1+2(a:_digi, au_digi)		読んだ時	1+2(joNda_dogi)
	会った	1(att)		読んで	1(joNde)
	会った時	1+2(att_dogi)		読むな	1(jomuna)
	会って	1(atte)		読まない	2(jomane:)
	会うな	1(auna, a:na)		読めば	1(jomeba)
	会わない	2(a:ne:)		読め	1(jome)
	会えば	1(aeba, a:ba)	2bx	出す	1(dasu)
	会え	1(ae)		出す時	1+2(dasu_dogi, dasu_togi)
2b2	打つ	1(uzu)		出した	1(dasita)
	打つ時	1+2(uzu_dogi)		出した時	1+2(dasita_dogi)
	打った	1(utta)		出して	1(dasite)
	打った時	1+2(utta_dogi)		出すな	1(dasuna)
	打って	1(utte)		出さない	2(dasane:)
	打つな	1(uzuna)		出せば	1(daseba)
	打たない	2(udane:)		出せ	1(dase)
	打てば	1(udeba)	3a1	着せる	0(kiseru)
	打て	1(ude)		着せる時	5(kiserudogi, kisettagi)
2b2	書く	1(kagu)		着せた	0(kiseda)
	書く時	1+2(kagu_dogi)		着せた時	5(kisedadogi)
	書いた	1(kaida, <o>ke:da)		着せて	0(kisede)
	書いた時	1+2(kaida_dogi, <o>ke:da_dogi)		着せるな	3(kiseruna, kiseNna)
	書いて	1(kaide, <o>ke:de)		着せない	0(kisene:)
	書くな	1(kaguna)		着せれば	0(kisereba)
	書かない	2(kagane:)		着せろ	0(kisero)
	書けば	1(kageba)	3a1	曲げる	0(mangeru)
	書け	1(kage)		曲げる時	5(mangerudogi, mangettogi)
				曲げた	0(mangeda)

類	項目	田野畠	類	項目	田野畠
3a2	曲げた時	5(mangedadogi)	3b1	送らない	0(ogurane:)
	曲げて	0(mangede)		送れば	3(ogureba)
	曲げるな	3(mangeruna, mangeNna)		送れ	0(ogure)
	曲げない	0(mangene:)		続く	0(cuzugu)
	曲げれば	0(mangereba)		続く時	5(cuzugudogi)
	曲げろ	0(mangero)		続いた	0(cuzuida)
	建てる	2(taderu)		続いた時	6(cuzuidadogi)
	建てる時	2+2(taderu_dogi, tadt_togi)		続いて	0(cuzuide)
	建てた	1(tadeda)		続くな	3(cuzuguna)
	建てた時	1+2(tadeda_dogi)		続かない	0(cuzugane:)
	建てて	1(tadede)		統けば	3(cuzugeba)
	建てるな	2(taderuna, tadeNna)		統け	0(cuzuge)
	建てない	2(tadene:)		並ぶ	0(narabu)
	建てれば	2(tadereba)		並ぶ時	5(narabudogi)
	建てろ	2(taderu)		並んだ	0(naraNda)
3a2	伸びる	2(nobiru)		並んだ時	6(naraNdadogi)
	伸びる時	2+2(nobiru_dogi, nobit_togi)		並んで	0(naraNde)
	伸びた	1(nobida)		並ぶな	3(narabuna)
	伸びた時	1+2(nobida_dogi)		並ばない	0(narabane:)
	伸びて	1(nobide)		並べば	3(narabeba)
	伸びるな	2(nobiruna, nobiNna)		並べ	0(narabe)
	伸びない	2(nobine:)		笑う	0(wara:) (OK)
	伸びれば	2(nobireba)		笑う時	5(wara:dogi)
	伸びろ	2(nobiro)		笑った	0(waratta)
	出来る	2(degiru, <m>degeru)		笑った時	6(warattadogi)
	出来る時	2+2(degiru_dogi, degit_togi)		笑って	0(waratte)
	出来た	1(degida)		笑うな	3(wara:na)
	出来た時	1+2(degida_dogi)		笑わない	0(wara:ne:)
	出来て	1(degide)		笑えば	3(wara:ba, waraeba)
3ax	出来るな	-		笑え	0(warae)
	出来ない	2(degine:)	3b2	泳ぐ	2(ojongu)
	出来れば	2(degireba)		泳ぐ時	2+2(ojongu_dogi)
	出来ろ	-		泳いだ	2(ojoida)
	送る	0(oguru)		泳いだ時	2+2(ojoida_dogi)
	送る時	5(ogurudogi, oguttagi)		泳いで	2(ojoide)
	送った	0(ogutta)		泳ぐな	2(ojonguna)
	送った時	6(oguttadogi)		泳がない	3(ojongane:)
	送って	0(ogutte)		泳げば	2(ojongeba)
	送るな	3(oguruna, oguNna)		泳げ	2(ojunge)

類	項目	田野畠	類	項目	田野畠
3b2	下がる	2(sangaru)	3b3	隠す	2(kagusu)
	下がる時	2+2(sangaru_dogi, sangat_togi)		隠す時	2+2(kagusu_dogi, kagusu_togi)
	下がった	2(sangatta)		隠した	2(kagusita)
	下がった時	2+2(sangatta_dogi)		隠した時	2+2(kagusita_dogi)
	下がって	2(sangatte)		隠して	2(kagusite)
	下がるな	2(sangaruna, sangaNna)		隠すな	2(kagusuna)
	下がらない	3(sangarane:), 2(sangaNne:)		隠さない	3(kagusane:)
	下がれば	2(sangareba)		隠せば	2(kaguseba)
	下がれ	2(sangare)		隠せ	2(kaguse)
	頼む	2(tanomu)		入る	1(he:ru, <n>hairu)
3b2	頼む時	2+2(tanomu_dogi)		入る時	1+2(he:ru_dogi, he:t_togi)
	頼んだ	2(tanoNda)		入った	1(he:tta)
	頼んだ時	2+2(tanoNda_dogi)		入った時	1+2(he:tta_dogi)
	頼んで	2(tanoNde)		入って	1(he:tte)
	頼むな	2(tanomuna)		入るな	1(he:runa, he:Nna)
	頼まない	3(tanomane:)		入らない	3(he:rane:), <n>hairane:, 2(he:Nne:)
	頼めば	2(tanomeba)		入れば	1(he:reba)
	頼め	2(tanome)		入れ	1(he:re)
	払う	2(hara:, harau)	2k2	無い	1(ne:)
	払う時	2+2(hara:/harau_dogi)		無いもの	1+2(ne:_mono)
3b2	払った	2(haratta)		無くなる	1+1(nagu_naru)
	払った時	2+2(haratta_dogi)		無くて	1(nakute)
	払って	2(haratte)		無かつた	1(nagatta)
	払うな	2(harauna, hara:na)		無ければ	1(ne:ba, nagattara)
	払わない	3(hara:ne:)		良い	1(je:, joi), 3(jokkoi)
	払えば	2(haraeba)		良いもの	1+2(je:/joi_mono)
	払え	2(harae)		良くなる	1+1(jegu/jogu_naru)
	歩く	2(arugu), 1,2. (arigu)		良くない	1+1(jegu/jogu_ne:)
	歩く時	2+2(arugu_dogi), 1+2, 2+2. (arigu_dogi)		良くて	1(jokute, <m>jekute)
	歩いた	2(ari:da, aruida, arutta), 1,2. (aritta)		良かった	1(jegatta, jogatta)
3b3	歩いた時	2+2(ari:da/aruida/arutta_dogi), 1+2, 2+2. (aritta_dogi)		良ければ	1(je:ba, joiba, jegattara, jogattara)
	歩いて	2(ari:de, aruide, arutte), 1,2. (aritte)	2k2	濃い	1(koi)
	歩くな	2(aruguna, ariguna)		濃いもの	1+2(koi_mono)
	歩かない	3(arugane:), arigane:)		濃くなる	1+1(kogu_naru)
	歩けば	2(arugeba, arigeba)		濃くない	1+1(kogu_ne:)
	歩け	2(aruge, arige)		濃くて	1(kokute)
				濃かった	1(kogatta)
				濃ければ	1(koiba, kogattara)

類	項目	田野畠
3k1	赤い	0(age:, agakoi)
	赤いもの	4(age:mono)
	赤くなる	0+1(agagu_naru)
	赤くない	0+1(agagu_ne:)
	赤くて	0(agakute)
	赤かった	3(agagatta, agegatta)
	赤ければ	0(age:ba), 3(agagattara)
3k2	白い	2(sire:, 3(sirokoi)
	白いもの	2+2(sire:_mono)
	白くなる	2+1,1+1.(sirogu_naru)
	白くない	2+1,1+1.(sirogu_ne:)
	白くて	2,1.(sirokute)
	白かった	2,1.(sirogatta), <m>2(siregatta)
	白ければ	2(sire:ba), 2,1.(sirogattara)